

コメントに対する講演者の回答

司会：溝部英章教授 それでは定刻を3分程過ぎましたが、午後のフリー・ディスカッションの部を始めさせていただきます。午後の部の司会役を務めますのは本学法学部教授であります、そして世界問題研究所員を兼ねております、溝部と申します。よろしくお願いします。午前中と同じでありますけれども、通訳を山田えりかさん、それからブルンクホルスト先生、フィニ先生にそれぞれ、通訳の方をつけております。それから司会の補助としてスウェールさんに翻訳をしてもらう事になっております。

フリー・ディスカッションは時間的に申しますと、5時45分まで時間がございます。時間は3時間45分ございますので、まず午前中の6人のコメンテーターの方々の発言を受けまして、昨日来、メインのキーノート・スピーチを頂きましたブルンクホルスト先生とフィニ先生から、レスポンスを頂戴したいと思います。そのあと、6人のコメンテーターの方々にその2人の講演者に対する、2人の講演者からのレスポンスに対するレスポンスをして頂くというかたちで、まず始めたいと思います。

それではまず、ブルンクホルスト先生にお願いを致します。よろしくお願いします。

ブルンクホルスト教授 ありがとうございます。最初に、ブラッドリー・エドミスターさんの素晴らしいご発表に感謝したいと思います。私も大部分は同意見です。特に、国家的また国際的な私法および公法の履行と執行に対して国民国家が果たす、重要かつ必要不可欠な機能については同意見です。

民主的国家・共和制国家はもはや世界政治や法において唯一無二の中心ではありませんが、それでも世界の機構の中でもっとも重要なものの一つではあります。今では、国家自体が世界機構になったとも言えます。と申しますのも、たとえそれが破綻国家であろうとも、ある独立国家の領土でないような場所はもはやどこにもないからです。国家が衰退する時というのは、国際共同体が国家形成プログラムを導入し始める時なのです。国家が自身のグローバル化に対して支払わねばならない代価は、私たちが国際共同体と呼んでいる、国家および非国家的行為者の多様な憲法体制システムに国家を統合することでした。国家的・国際的・国家横断的（トランスナショナル）・超国家的機構のシステムの欠くことのできない一部として、国家はその主権を失ってきました。今日の世界国家権力は、国民国家間の機構、国民国家を超越した機構の、主にその立法および司法権に深く依存しています。こうした機構はグローバルな機能システム、特にグローバル経済を規制しています。

しかしながら、私は自由市場の持つ影響力については、エドミスターさんほど楽観的にはなれません。経済的自由は近代社会の大きな前進の一つでしたが、「経済的自由」が自動的にあるいは必然的に「民主的自由」に繋がるわけでは決してありません。民主的自由には、単に経済の「規制」

だけではなく（規制緩和というものは存在しません、というのもあらゆる規制緩和は同時に再規制を必要とするからです）、万人に対して平等な機会とある量の福祉を保障するような経済の「立憲制度化」が必要なのです。グローバル経済にとっての基本的な問題は、国家あるいは現存する他のグローバル機構や、出現しつつある憲法体制のいずれもが、衰退しつつある民主的社会福祉国家の、今やグローバルな「ターボ資本主義」となった経済を強力な憲法支配のもとにおくだけの力を持っていないことにあります。

国家の中に埋め込まれた市場を持つ、国家の中に埋め込まれた「後期資本主義」の古き時代とは異なり、いま存在するのは市場の中に埋め込まれた国家を持つグローバルな「ターボ資本主義」であり、市場の中に埋め込まれた国家の経済とは、規制はされているけれど脱憲法化された経済のことです。脱憲法化には勝者と敗者があります。勝者とは中産階級の上層部分（そして上流階級）であり、敗者とは、あらゆる基本的な社会制度を享受することから排除されている多くの人々のことです。敗者は、労働・消費者運動・市民権・教育・法・政治参加などから排除されています。現在まで、脱憲法化されたグローバル経済の敗者は、下層社会と、ますます増加しつつある中産階級の下層部分であり、周縁、フランス語で言う地球の「郊外」に住む人々なのです。ネオリベラリズムの支持者は、こういう人々に対して単に万人に対しての輝かしい未来という「空約束」を与えるだけです。経済的自由は、敗者には「経済的自由」を私的に使用できるという空約束以上のものを与えることはできませんが、「民主的自由」は、経済的進歩における敗者の手に社会的状況を変えることができる政治的手段を与えます。私たちに民主的自由と経済的自由の両方が必要であることは確かですが、経済的自由のみでは民主主義の前提条件となるにはほど遠いのです。経済的自由が民主主義に適合するのは、ヒットラーの第三帝国、ピノチェットのチリ軍事独裁政権、中国の共産党独裁体制に経済的自由が適合した程度でしかないのです。

エドミスターさんは私法に焦点をあてておられますが、この点に関しては私もおっしゃっていることにほぼ同意見です。しかしエドミスターさんは時に私が一番申し上げたいことを言われていません。

私たちは国際的な「私法」と国際的な「公法」とを峻別すべきだと思います。国際的私法が主に法廷と契約にかかわるものであることは、エドミスターさんの言われる通りです。私法においては、いかなる議会も拘束力のある決定をすることはありませなし、私法においては、個々人・企業・それ以外の法的な行為者は、相互に拘束力を持ついくつかの規範において自発的に同意しています。こういう人々や企業こそが私法の本来的な創造者です。相反する二つの集団が互いにノーと言える平等な機会を持つ限り、このことには何の問題もありません。私法における平等な自由の必要条件とは、当事者双方がノーと言った場合に真の代替案を持っていることです。この条件は、例えば労働市場では自動的に満たされることは決してありませなし、民事法廷や紛争解決機関のみで

は、個人の自由裁量権を平等に使用する必要条件を保障するには十分ではありません。法廷は立法者ではないのですから、法廷にできることはそういう平等な使用を制御することであって、それを作り上げて履行することではないのです。それゆえ、グローバル市場と私法体制の基本的条件は、しばしば個人の行為者の不平等な自由を意味することになります。特にいわゆる「第三世界」や「限界点に位置する国」では、貧しい人々は、強力な労働組合から十分な援助を受けることもなく、自分を守るための十分な司法救済もなく、十分な社会保障などもないのです。ここでは、生き延びるために労働を必要とする人々にはノーと言う機会もないのです。しかし、職を探している人は非常に多いので、雇用主はいつでも「ノー」と言えるのです。こうした場合、市場の平等な自由というのはすべてフィクションにすぎません。この個人的な自由という虚構性は、公的な立法によってのみ克服されることができ、公的な立法は、あらゆる公的な立法を履行するのに十分な（行政上の）方策がある場合にのみ機能します。

市場・経済的自由・私法体制を効果的にグローバル化する際の一番の問題は、市場の発展を制御し、グローバルな法体制の中で経済的自由を平等に使うことのできる基本的な条件を履行する憲法手段が十分ではないことです。市場に埋め込まれた国家の世界では、国家の憲法体制は、EU とか WTO または国連安全保障理事会のような新しいポストナショナルな憲法体制と「共になって」こそ、全世界の平和への脅威を制御することができ、独裁体制や破綻国家の多い地域に一層の影響力を与えつつ、人権体制を制御し履行することができ、多大な人権侵害や大量虐殺を防ぐことができるのです。公的になったグローバルな国家体制は、デュルケームのいう、契約における契約以前の条件（pre-contractual conditions of contracts）を満たすのに十分な力があり、世界経済を再規制することができるのです。今日の世界憲法体制は、アメリカ合衆国のような最強の超大国をも、国際的な法の支配の中にある一つの超大国の位置に置くことが十分できるのです。特にこのことはグアンタナモ基地の例に見て取ることができます。ここで合衆国最高裁は、グアンタナモ基地においてもまた世界中のいかなるテロリズムの事例においても、米国はジュネーブ協定を守らねばならないと判断いたしました。

世界憲法体制の主要な前進点は、もはや古典的な君主あるいは君主国のように、法の支配の境界線上に、あるいは法の支配を「超越」して存在するような「帝国主義」がないことにあります。今日存在するのは単に覇権主義のみであり、帝国主義とは異なり覇権主義は常に法の支配の内側で作動しなければならないのです。だからと言って、特に超大国によって行われたならば、制裁を受けることがないような「違」法行為がなくなったわけではありませんが、ある特定の法的共同体の統治権力者の「脱」法行為はもはやなくなったのです。しかし、国家の中に埋め込まれ十分に憲法化された後期資本主義の古き時代とは異なり、現在の世界憲法体制は、特定の支配権力と特定の支配階級の覇権主義に対して民主的な平等性を強いるほどの力はありませんし、現在の世界憲法体制は

私的また公的な自由裁量権を平等に使用するための基本条件を制御したり履行したりするほどの力もありません。国際的・国家横断的・超国家的な法律が持つ弱点の主因のひとつは、国際的な憲法化の過程は、同時に国際法を脱形式化する過程でもあることにあります。

今日の国際法は、私法であれ公法であれ、多くの領域において、「非公式な」約束・会議・協議から生れる「やわらかい法」なのです。バーゼル委員会やEC、あるいはG8のような非公式な権力は立法によって変えることはできませんし、裁判所によって実質的に支配されることもありません。それゆえ、非公式に作り出されたやわらかい法は、国際法のみならず、とりわけ国家の立法や司法に「強い影響」を与えていますし、脱形式化されたやわらかい法を通じて、しばしば民主的な過程が、行政的で覇権主義的な権力から迂回路を作られ、周縁化されています。要するに、現在のグローバル経済と政治にとって大変誤っていることは、「第一に」経済的コミュニケーションのあらゆる生産力の漸進的な爆発が、あらゆる国家的、あらゆる国際的・国家横断的・超国家的な憲法によって規定されている、万人にとっての平等な自由の基本条件を破壊していることです。「第二に」現在の世界秩序に関して誤っていることは、覇権、とりわけアメリカの覇権がなければ、いかなる法的平和も、多大な人権侵害に対する効果的な阻止もありえないことですが、同時にこの人権と平和維持の覇権主義そのものが、全世界の民主的自己規範の可能性の条件を土台から崩しているのです。国際的公法とグローバル憲法主義が持つ二つの短所の結果は、新しい国家横断的な支配者層の出現であり、クレイグ・キャルホーンはその支配権を「少数者のコスモポリタニズム」と巧みに名づけています。

さて、非常に手短かではありますが、三島教授のご発言について2点ほど私見を述べさせていただきます。とりわけ、過去というものの持つ役割について三島教授が言っておられることには、私も賛同いたします。すでに述べましたように、第二次世界大戦で犠牲となった人々と過ちを犯した人々との区別がきちんと語られずに抑圧されたままだとしたら、そして特にその罪科が、罪を犯した人々が属する国によって認められることがないならば、東アジア全体の民主的共同体には安定した平和も未来もない、ということを強調されることはまったく正しいと思います。しかし三島教授は、国民国家を超えて達成されるコスモポリタニズム的な秩序は非民主的な秩序となるのかという重要な（懐かしきカント的な）問題も提起されておられます。それ以上に（マルクスと共に）三島教授は、権力と覇権の事実性にはどう対処すればよいのか、そして法の支配の中で覇権的な権力が支配的になることをどうすることができるかという問題を私たちに突きつけておられます。ここで法の力を信じることは幻想にすぎないのではないのか？ この問題は極めて真摯に考えねばなりません。と申しますのも、無法状態よりはなんらかの法がある方がよいとは言え、グスタフ・ラートブルフがかつて述べたように、法は必ずしも被支配階級の味方をするのではなく、フィリップ・アロットが（そしてマルクスが）述べるように、支配階級の味方をすることもあるからです。その通りなので

す。ハーバマスが法哲学についての著書の冒頭で述べているように、法にはヤヌス神のような二面性があるのです。マルチ・コスケニエミーなら言うでしょうが、それは一人の人間の中に二人の対立する人格が存在するジキルとハイドのようなもののなのです。しかし法をめぐる社会階級や集団の争いの中で、被支配階級の人々や周縁に押しやられた集団には、法を変え、形式化し、万人に平等な形式規範によって支配階級を拘束する機会があるのです。今日の覇権勢力はこの力を持ってはなりませんし、覇権の構造は一層の平等主義、一層の民主的自由を求める方向に変えられる可能性があります（しかし変えられてはなりません）。急進的な改革主義は（時には革命すらも）、先験的には機会がないわけではないのです。

さて、私の持ち時間は終了しましたし、私が大部分は賛同する他のコメンテーターの方々にお答えすることができなかったことをお詫びせねばなりません。しかしながら、もっとも重要な点のいくつかは、私の長すぎた話の中で言及することができたように思います。

司会：溝部氏 それでは続きましてフィニ先生のコメント、レスポンスを頂戴したいと思います。お願いいたします。

フィニ氏 ここでは、特に三島先生とブラッドリー・エドミスター先生に対して御返答をさせていただきます。ほかの先生方の発表も、皆様それぞれの異なった視点によってとても興味深いものであったのではございますが、このお二人からいただいた反論がもっとも厳しいものだったため、というのが理由です。とりわけ、三島先生は私が悲観主義者で、過去に思慕する懐古主義者であり、保守主義者だということを指摘されています。しかしそうではありません。

私は、現在の発展モデルのほとんど何をも守りたいとは思っておりません。過去へ振り向いてもいません。未来を見つめております。過去を引き合いに出すのは、現在の虚偽や大なり小なりの幻想などの欺瞞を暴くためなのです。私に言わせれば保守主義者とは、右の人間であれ左の人間であれ、自由主義者であれマルクス主義者であれ、現在の発展モデルを守ろうとしている人間がそれに該当するのです。彼らは近代性のトップにいると自負し、実際、近代性の中で生まれ育ち、そしてそこで成功を勝ち得た以上、トップであるのです。しかし残念な事に、この二世紀半の間には、ご存知のように18世紀の英国における産業革命に始まる前進を始めたこの近代性という物がすでにとても古いものになってしまったのです。これらはもはや近代的なものではなくなりました。なぜならこの二世紀の間に歴史は、それまで人々が知りえなかったような速さで歩みを進める事になったからです。それゆえ、右翼であれ左翼であれ、あるいは自由主義やマルクス主義のさまざまな傾向をもってしても、現代の人間の深い要求に答える事ができなくなっています。

私たちは今から二世紀半の昔に、びかびかに磨かれた機関車に牽かれた、さも素晴らしい汽車に乗りこみましたが、それによって幸せな世界へと到着できるはずでした。しかし、このように事は運びませんでした。今日求められている事は、この列車に乗っている私たち旅人をどのように快適

に旅をさせるかという事ではなくなり、まったく別のものになりました。つまりまず第一に、この列車はいったいどこへ向かうのか、という問題があります。そして次に、その列車のびかびかの機関車の運転している、あるいは運転できていると信じている人たちが、まだ今も操縦をコントロールできているのか、という事です。この列車が、まだ彼らの運転から外れて暴走を始めていなくて、私たちがまだその列車の方向やスピード、異なる目的を決めることが出来るのか、それともあるいは250年前にその列車が置かれた線路の上で、決まった方向へ、スピードを増し続けながら、私たちを避けられない破滅へと向かわせるのか、という事です。なぜなら、譬え話をやめて説明させていただきますと、機関士にもわかることですがこの指数関数的な成長に則ったシステムは、(私の発表でも述べさせていただいたことですが、これは数学としては存在しても、自然界にはありえないことです)、ある時点が来れば崩壊を起こさざるをえません。それゆえ最終的には、われわれは二世紀半の昔、はたして正しい列車に乗ったのだろうか、という疑問が生まれてくることになります。この事がわたしの考察の核心部分です。

三島先生から私への二番目の反論は、必ずしもすべての「人道的介入」には、他の政治的、経済的な利害が隠されているわけではない、多くのものは善意のものだということです。これはまさにその通りです。しかし、私はそれ以上の事を考えるのです。私たちは善を行っているのだと本当に心底確信しているのです。そして私たちの価値観という物が普遍的なもので、それは、われわれとまったく違った歴史や経験、伝統などをもつ他の人々や文化、文明などに対しても有効だと確信しています。恐ろしいのは悪意ではありません、この善意なのです。悪意は多かれ少なかれ隠蔽する事ができます。一方、善意は錆を生じる事もなく、自分にたいするその自負ゆえに、冷静でまた確固たる自覚を持って前へと進んでいくものです。残念な事ですが、歴史を見ればわかるように、地獄だけではなく、人類史の歩みすべてが、この善意というものによって掃き清められた道の上を歩み続けてきたのです。

第三の点ですが、ひょっとすると誤解があるのかもしれません。三島先生は、私が全体主義思想をユダヤ＝キリスト教的思想、特にキリスト教思想の責任に押し付けているとおっしゃられます。そうではないのです。私は、キリスト教思想の中、伝道というコンセプトには、「福音」を知らしめるということを合法的に希求するのみならず、他者をキリスト教徒に改宗する事を強要するという考えが含まれていると考えます。ここに、西洋における全体主義の核心があります。これを、私はイタリアで出版し好評をいただいた本の中で「暗い悪習」と名づけたのですが、これが西洋史全体に刻まれているのです。全てのものを「単一に帰する」という自負です。もちろん今日、西洋、とりわけヨーロッパにおいては、全体主義は宗教的なものではありません。なぜならばキリスト教的なものなどの宗教的な存在は欧州ではほとんど何も残っていませんから。それは世俗的な全体主義で、多くの場合後者ですが、善かれ悪かれ、自身の価値観、自身の文化、自身の「ウェイ・オブ・

ライフ」、そしてとりわけ自身の経済システムを伝えようとし、そして、「他者」という物を理解しようとしません。

私はこれをもって、ブラッドリー・K・エドミスターさんにもお答えしたいと思います。彼は、経済的グローバル化と世界化は、世界の72カ国しか市場主義化されていない、未完成であると述べられています。これは正しいのですが、しかし、同時にわたしたちが如何なる手段を使っても、残る120カ国すべてを西洋と同一化しようとしているのも事実です。その最も良い例はアフガニスタンでしょう。ムラー・オマルのアフガニスタンは、言いにくい事ですが、アメリカ化とまでは言いませんが、近代化というものをまったく望んでいなかった非常に多数の国民の支持を受けていたにもかかわらず、砲声と劣化ウラン弾の爆撃によってこの世からきれいさっぱり排除されました。これは、結局は見つけられなかったビン・ラディンという一人の男を捜し、発見するという口実のもとに行われたことです。ともかくも国民の多数を代表していたムラー・オマルとタリバンの代わりには、カルザイのような、ユノカル（米国カリフォルニア州に本部をおく石油会社―訳者注）の相談役であるアメリカ側の人間がつけられました。われわれ西洋人は、自分たちの歴史を押し付けるために、アフガニスタン人の歴史を奪い取ったのです。

最後に一言、朱建榮先生にいくつか、むしろ多くの点で共感しておりますが、これを光栄に思っていることを表明させていただく事をお許しください。この中国とイタリア、あるいは欧州という（この場合、私はイタリア人ですので、イタリアとなるでしょう）、まったく文化の違う国の知識人の間に共感するものがあるという事は、自分こそ真実を味方につけていると確信しながら前進し、彼らや私たちの望む方向とは逆に私たちを悲劇へと運んでゆく、「抜き身の剣」を振りかざす現在の成長モデルの主唱者や支持者に何かを考えさせるのではないのでしょうか。

ありがとうございました。（拍手）

パネル・ディスカッション

司会：溝部氏 それではコメンテーターの方々、もう発言をしたいという気持ちで満ちているかと思えますので、順次ですね、エドミスターさんから順次レスポンスに対するレスポンスを手短によりしくお願い致します。

エドミスター氏 これまでの2つのお話をお聞きして、かいつまんでお答えいたしますが、ブルンクホルスト教授と私は同じ全体的枠組みの中で語っており、考え方の多くを共有し、国際社会を作り上げる正しい方策についての答えを2人とも探しているのだと思います。一方で、フィニさんのお考えになっているしかるべき世界秩序のビジョンは私たちへの対案のようなものであり、ちょうど二枚の異なった絵を並べて掲示しているようなもので、直接には共通する部分が少ないように思い

ます。

フィニさんへのお返事としては、そうですね、フィニさんから感じたのは、フィニさんは社会のグローバル化とか国際化をご覧になって、標準化の中である種の文化的真正性が失われつつあるのを見ておられるのではないか、他の国同様にイタリアに対するアメリカの影響はヨーロッパの広範囲にわたる標準化である、ということです。フィニさんは、ヨーロッパ社会、つまりはイタリア社会は、ヨーロッパを閉ざすことで、焦点を内向きにしてグローバリゼーションに対抗することで、イタリア文化の真正性が破壊されることに対処するという対案を出されています。私が一番心配すると言いますか、疑問に思いますのは、フィニさんも指摘されたように、イタリア国民自身は国際的で外向きの志向を持っている、ということです。イタリア人はヨーロッパ的・アメリカ的なものを自らの生活様式に適応させてきました。イタリア人には「アメリカンタ」が必要なのです。イタリア人には進歩が、あるレベルでの近代性が必要なのです。グローバリゼーションを拒絶する閉ざされた社会を作り上げることで、イタリア人の外へ向かう意欲、外へ向かい国際化したいという志向、コスモポリタンの志向を、どう押さえつけることができるのでしょうか。それができるのは、ある新しい形の政府によってのみです。そして、このような政府はおそらく自由や自由な表現それに民主主義を支持する政府にはなりようがないでしょう。と言いますのも、こうした形の政府は、このような外へ向かう志向をいかに抑圧し阻止するかという問題と必然的に直面することになるからです。私が恐れますのは、フィニさんが支持されるような、閉ざされたヨーロッパというモデルを適応させることで、民主主義と自由が破壊されてしまうのではということです。

私の話に関しましてブルンクホルスト教授がおっしゃっていただいたことには大変感銘を受けました。私たちは二人とも、進歩の源泉としての民主主義と近代主義の共通する価値を共有していると感じました。私たちはフィニさんのような悲観主義的な考えは持っておりません。

ブルンクホルスト教授と私が考えを異にすると思われるのは、国際的な社会を作り上げるのに用いられる適切な体系においてです。ブルンクホルスト教授は国際的な形式法の拡大を支持されています。「やわらかい法」、すなわち国際公法において長年にわたり増大してきた非公式な国際団体のようなものは、ある程度反民主主義的なものであるということを言われるブルンクホルスト教授は、まったく正しいと思います。形式法は絶対的であるがゆえに人々を拘束するというのも、その通りだと思います。アメリカ合衆国は確かに柔軟で「やわらかい」多国間フォーラムを好みます。変化しつつある世界においては、柔軟性が役立つと思うからです。そして形式法は絶対的に拘束的です。このことは形式的な拘束がある安全保障理事会に見て取ることができます。ただ、ヨーロッパでは、社会が民主的であるからこそ形式法はある程度成功をおさめてきたのではないのでしょうか。ヨーロッパの人々は共通の価値観を持っています。経済的な繁栄を共有し、国家における社会福祉とそれがどう機能すべきかについての良識を共有しています。ヨーロッパの人々は、これま

で、広く賛同を得られた形式法を作り上げることができました。ですから、形式法を作るときにある程度問題になるのは、誰がそれを作るのかということなのです。誰がこれらの体系を履行すべきなのでしょう。誰が形式法を作るべきなのでしょう。そして、形式的な法体系は民主的なものになりうるのでしょうか。ここが大切な点だと思います。EU 憲法に対するヨーロッパの人々の最近の反対意見のいくつかは、テクノクラートや官僚への不満があり、EU の形式法は民主的にも適切でなく人々の要望に応えるものでもなかったという感覚があったせいではないでしょうか。

ですから、論文でも書きましたように、私が懐疑するのは、もし国家横断的な世界にあまりに性急に形式法を押し付けようすると、それは現在「やわらかい法」についての対話に携わっているのと同じ種類の分離独立した組織によって、実務的な問題として取り入れられることになるのではということです。こういう組織は十分に民主的足りえ、民主主義原理とのある種のつながりで強化された形式法を本当に作りあげることができるのでしょうか。だからこそ私は、私法が、国家の法体系と国家の法制度の、より契約的でその場その場での特別な使用において、思想の創造的な自由市場を発展させるのに成功してきたのだと言いたいのです。私が申し上げたかったのは、国家横断的な世界における活動は、国家横断的な体系と機能的なグローバルシステムを国家的な法体系と必然的に絡み合わせることですでに適切に実現されているのであり、国際的な形式法を作り上げなくても、私たちは国家横断的な世界に対する力を保持できているということなのです。

司会：溝部氏 ありがとうございます。それではまた反論もあるかと思いますがとりあえずコメントーターの方々は順番に回したいと思います。それでは続きまして朱建榮先生よろしく申し上げます。

朱 建榮氏 はい。私は EU と東アジアの関係について少しコメントしたいと思います。東アジアの未来を考える上で、どこまで EU から学べるかということですが、結論から申し上げますと、たくさん学ぶべきであり、EU だけでなくアメリカ、その他世界の各地からたくさん学ぶべきです。一方、そのまま真似るのではなく、東アジア自身の文化に根ざして、その上で、一定の東アジアの特徴ある未来を模索していくべきではないかと思います。

そもそも EU が今日の様に一つの共同体になった背後に経済交流など以外に共通したヨーロッパの宗教・文化、それから比較的近い発展の段階というのが基礎ではないかと思います。それに対し、東アジアっていうのは、宗教、発展の段階という所から見れば、実は最も多様性のある所です。世界のほぼあらゆる宗教がここに存在し、また先進国の日本から世界の最も後進的な発展地域に至るまで皆この地域にあるわけですね。そこで一種の共通性、対等性をすぐ求めていこうとしても無理ですので、そこにはアジア自身の特徴を配慮しながら、徐々に推進して行かなければならないと思います。まず、この地域の経済発展、国民の基本的権利の確保、教育水準の向上、そして国境を越えたいろんな経済問題をめぐる協力ですね、それをまずやる必要があるかと思います。

民主主義というのは、東アジア諸国、中国を含めてそれは当然求めて行かなければいけないし、今の中国の経済改革・開放路線の延長でおそらくあと15年、20年で国政レベルでの民主化というのも来るのではないかなと思います。今の中国でミドルクラス・中間層の人口は既に、4億から5億に達してですね、その中間層の人口が全国の人口の半分以上に達した時点で韓国・台湾・東南アジアの例で見ても民主化の流れはもはやもう止められないと思います。これを申し上げたのはすなわち、性急に全て民主化を実現すれば、もう他は全部ついて来ると、他の問題は後回しにして良いというわけではないという点です。今の中国の中で大半の人はアメリカ、ヨーロッパ、日本の様な先進的な民主主義国家になりたいんですけれども、しかし今のロシア、今のインドには正直言って、なろうとは思っていないわけですね。ロシアは一応国政レベルで民主化はしています。しかしその中でどうも独裁を完全に封じ込むというしくみが出来たかどうか、また国の中のマフィア経済が本当の市場経済の確立をどこまで阻害しているのか、そこはかなり心配の目で見えています。一方、インドは、自称、世界最大の民主主義国家です。しかしこのインドで人間が生まれて不平等であるカースト制度すら解消出来ていないわけですね。で、何を言いたいかというと、別に今の中国のままでいいというわけじゃないんですが、民主化に至るプロセス・段階が必要だということです。まずこの国で経済発展、国民生活の向上、教育水準の向上をやること、言ってみれば家の中の地盤、地面を固めることです。次に民主化という屋根を支える柱を作ることです。法治のメカニズムの構築、市場メカニズム、競争原理の確保、平等に分配するシステムなどですね。それも今の中国は道半ばでほとんど出来ていないわけです。で、ロシア・インド・中国およびラテンアメリカの多くの国について言えば、その様な固い地面と堅実な柱が出来て、その上で初めて真の民主主義が出来ると思います。アジアはそういう意味でこれからまず基礎的な部分から強化していかなければなりません。それから、アジアにはもうひとつ長所があります。ヨーロッパに比べて他の文化・宗教に対して寛容で、互いに共存するということについて、おそらく他のヨーロッパやアメリカよりも寛容性・受容性があるわけですね。そういう意味でもアジアの将来に向けて、すぐひとつの基準でおしなべて統一性を求めるのではなく、経済発展、最低限の人権の確保という基盤の上でそれぞれの文化を尊重して徐々に共通点を拡大してゆくこと、その過程でヨーロッパの平等、アメリカのダイナミズム、アジアのこの寛容性を併せて、基盤にすること、その上でアジアの共同体の未来を求めて行かなければならないのではないかと思うわけです。以上です。

司会：溝部氏 ありがとうございます。それでは三島先生よろしくお願いします。

三島憲一教授 まず申し上げたいことはデモクラシーと市場自由主義、もしくは資本主義とはいつも緊張的な相互補完関係に在るということです。同じものではないということです。対立することもあれば協力し合っていることもあるということです。それは、現在の中国あるいは戦前の日本その他を良く考えればよくわかると思います。どちらの場合も、資本主義は栄えていましたが、あるい

はいますが、デモクラシーの国家とは言えないわけです。三井、三菱、住友は、デモクラシーを好んだとは言えません。

その関係でもうひとつ言わなければいけないことは、アメリカは、デモクラシーの国家として常にヨーロッパの希望であったということです。18世紀、19世紀においてはとくにそうです。よくあるイメージは、ヨーロッパで落ちぶれていった人々が、あるいは食いつぶれた人々が「新大陸」に移民したというのですが、これは半分の真実でしかないです。移民はアメリカのデモクラシーの希望と結びついていました。もちろん食い詰めて移民した人もたくさんいますが、重要なことは、ヨーロッパから新しいデモクラシーへの希望を持って非常に優れた人々がアメリカに行ったということです。ゲーテはアメリカを礼賛しております。アメリカは非常に素晴らしい国だ。古いお城や古城、遺跡が一切ない。そういう国に私も住んでみたいと、言っている通りであります。あの陰鬱なカフカですらホイットマンの詩集『草の葉』を愛読しております。それくらいにアメリカは非常に優れた国であると、つまり、デモクラシー（自由と権利の平等）と豊かさがうまく結びついた国であると思われていました。戦後もヨーロッパがうまく行ったのは、アメリカの民主主義を何よりもドイツが、導入したからであると思われています。アメリカから「学んだ」わけです。日本もそうであります。多くを我々はアメリカに負っております。

ところが、実際のアメリカはその後、デモクラシーと資本主義をうまく共存させているとは思えない国に変わってしまいました。国内でも富の格差は激しいですし、大統領選挙の実体を見れば、とても自由な言論によって選挙が決まっているとは思えません。最も極端なのは、アメリカの外交政策、そして貿易政策です。それが大変に選択的であるというところに、多くの外国の人々、特に第三世界、あるいは日本も含めていいかもしれませんが、問題を感じているわけです。手じかな日本の例で自動車の輸出に関する歴史を考えればすぐにわかる通りで、まだ昭和30年代、40年代、日本が自動車に関して保護貿易主義をとっていた頃にアメリカはとにかく貿易の自由化を迫りました。やがて、トヨタ・日産その他が世界市場で強くなりますと、今度はアメリカが危なくなってきた、なんとか輸出を制限してくれと圧力をかけ始めました。そして日本の自動車業界はアメリカの政治的圧力に負けて、いわゆるセルフ・コントロール、自己規制を始めるということになりました。アメリカは、すべて自分に都合良く理解して、先ほどのアメリカのカルチャー・オブ・ダイナミズムで、つまり、リーガル・フォーマリズムでないやり方で結構やっている、という印象が拭えないわけです。すると、諸外国の人々は「やられてる」といった感覚をどうしても持ってしまうのは仕方ないかと思います。所詮は足して二で割る妥協で解決するしかない貿易問題はある程度理解できるとしても、国際的な紛争に関しては、特にベトナム戦争以来、どう考えてもデモクラシーやコスモポリタニズムを国際的な場でアメリカが実行しているとは思えないわけです。むしろ自分の利益を重視したダブル・スタンダード、いやトリプル・スタンダード、マルチ・スタンダードでやっ

ているという印象が世界の多くの地域で生まれています。

カントの国際立憲主義とは正反対です。つまり、カントが言ってる通り、自分自身の事柄に関して自分自身の裁判官であるのはまずい、to be judge in one's own issues ということは不可能であるという認識が、アメリカの政治、特に外交にはない、というわけです。貿易の争いについても、あるいは戦争に関しても、国際的な機構で、自分自身が自分自身の裁判官にならないようにする方法をアメリカは会得する気がないようです。誰でも自分のことは自分に都合よく判断するわけで、それを避けるための法的手続きの枠組みが必要ですし、それを複雑に積み重ねるのが、我々の現代社会のプロジェクトのはずです。リーガル・フォーマリズムに対して若干先ほどエドミスター氏からも懐疑の念が表明されましたが、実際にはそれしかないわけです。いろいろの異質な物がぶつかればやはりリーガル・フォーマリズムにせざるを得ないと思います。そうしなければ、支配的なパワーが、ヘゲモニー国家が好きなように牛耳り、好きなように牛耳れば牛耳るほど、問題があちこちに生じ、そのヘゲモニー国家でも手に負えなくなるという事態が現在の状況です。

リーガル・フォーマリズムの例を国際的な観点ではなくて、ごく普通の日本の大学で起きている例で説明したいと思いますが、例えば教授が自分の助教授として、自分自身のいいと思う人と呼んでくるのは、日本ではごく普通ですが、これはもうとんでもないことであって、リーガル・フォーマリズムの正反対です。もちろん、選考委員会が形だけありますけれども選考委員会は、多くの場合、当事者の教授の提案を大体適当に認めるだけです。ところが例えばドイツであれば選考委員会には学生の代表が座っているのは常識であって、場合によれば、他大学の先生の意見も聴取します。全然別の立場の人が選考のプロセスをちゃんと監視もし、一緒に議論もする、その制度が非常に確立している。そうすることによって優秀な人が呼ばれるわけです。

厳密に言うと、問題の次元が違うので、この比喩がどれだけ適切かどうかは分かりませんが、やはり同じようなことは、国際機構によっても為されなければいけないということです。従って国際刑事裁判所にアメリカが入ろうとしないというのはやはり多くの問題をはらんでいます。勿論アメリカはアメリカの特定の資本の利害と不可分に癒着したお人好しの善意でもっていろんなことをやっているかもしれませんが、その場合でも、いやその場合だからこそ間違いは必ず犯すわけです。そゆえ、やはり国際的なプロシージャ、形式的手続きというものにある程度は服さないといけないと思います。どういう時に服してどういう時に服さないかも、カルチャー・オブ・ダイナミズムは自分で決めていいようですけれども、やはりそれでは絶対にうまく行かないのではないかと思います。

申し上げたかったのは、資本主義とデモクラシーの関係は一筋縄では行かないこと、その点で、長い間ヨーロッパの希望であったアメリカに倒錯現象が甚だしいこと、それはヘゲモニー志向的な外交政策における「身勝手さ」によく出ていて、自分でも始末がつけがなくなっていること、その

点ではカント的な国際的立憲主義しか出口はないであろうことです。とりあえず、時間があるものでそのくらいにしておきます。

司会：溝部氏 ありがとうございます。それでは宋先生、よろしく願います。

宋 錫源氏 ありがとうございます。先ほどそれほど言わなかった北朝鮮との関係で、もう少し述べさせて頂きたいと思います。今現在、韓国におけるアメリカニズム、アンティ・アメリカニズムというものを考える場合に、一番韓国の立場がちょっとおかしいのではないかという風に思うかもしれませんが、韓国の場合、北朝鮮という同じ民族でありながら分かれている国が存在する、しかも、その北朝鮮という国が皆さんもご存知のように、今現在の東アジアにおけるアンティ・アメリカニズムが一番強い国ではなからうかと思っています。そんなアメリカという現代の超大国に対して喧嘩しても良いという風な姿勢に出てきたのは、東アジアでは現実的には北朝鮮以外にないと思います。そう言った北朝鮮との関係がございまして、北朝鮮の核疑惑問題とか、それは韓国だけではなくて、アメリカと日本の安全保障とも、非常に深くかかわっている問題だと思っていますけれども、韓国内で北朝鮮をどう見るか、それが対アメリカ認識と全く関っているんですね。それで、ソウル市役所の前の広場、そして国会議事堂のある汝矣島という大通りの隣に集まった民衆の集会を見ると対照的な姿が見受けられます。そのひとつは、多分2002年ごろだったと思いますけどもワールド・カップの年だったんですが、その時に韓国の女子中学生二人がアメリカの装甲車に轢かれて死亡しました。女子中学生は何の罪もなくアメリカ兵によって死亡しました。何の罪もない若い女の子二人でした。15、16くらいです。本当にかわいそうで、かわいそうでどうしようもないという人達、たとえばお父さんが3歳、4歳くらいの娘を肩車して市役所の前に、あるいはお母さんが息子を手に、汝矣島の広場に集まりました。手には蝋燭を持っていました。蝋燭を持って反アメリカ集会を開きました。その姿は物凄く感動的でもありましたし、それが韓国におけるまさか反米主義を象徴するような姿でありました。しかももう一方の姿は同じ場所で、違った方向に向けてデモをやっている人々のそれなんです。現在の政府が、金大中大統領の時からもそうなんですけども、いわゆる太陽政策ということで、国内にあまりにも暮らしぶりが悪い人達もたくさんいるのに、北朝鮮が同じ民族だという理由だけで我々の税金を北朝鮮向けに使いすぎているんじゃないかという風に思う人々がいる。昔の海兵隊の出身者達は、物凄く“^{ラード}極右”なんです。こういった人達がまた同じ場所でデモ集会を開きます。反政府運動なんですけれども彼らは韓国の旗とアメリカの星条旗を持ってデモに乗り出します。アメリカに対する親米と反米という対照的な姿が同じ市役所の前の広場に見受けられます。これが韓国の現状です。今の政権与党と野党、野党のハンナラ党と与党のウリ党との間には、その北朝鮮政策に対する駆け引きが激しく、それはある意味では対アメリカの認識の差であるという風な事が言えるかと思っています。韓国は確かにアメリカと同盟国です。同盟国ではあるんですけどもその在韓米軍の犯罪といいますか、そういったものにアメリカがもっと注意し

ないといけない。それは何故かといいますと、前に言いました女子中学生の場合、彼女達は死んだんだから被害者はいるわけですね。しかしその裁判権がアメリカにあります。韓国は何も打つ手はないのです。それで、裁判にかけられた人達は全部無罪になりました。何の罪もない女の子二人という被害者が明らかにいるんですけど、しかしながら加害者はいないという状況になりました。それはいくら韓国人が優しいと言っても、まあ本当に実際そうかどうか分かりませんが、こういった実態を受け入れるわけにはいかないと思います。そういう事がアメリカに対する反発の素になっています。北朝鮮に対する反発がまたアメリカに対する親密感を培っています。さあ、ここで韓国はどうやってこれからの韓国の運命を考えたらいいのか、宿命としてアメリカと距離を置くという選択肢は今一部の人達の中で議論されているところかもしれませんが、大勢の韓国人の中ではそれは好ましくもないし、選べる道ではないという認識では大体一致しているのではないのでしょうか。それは何故かといいますとやはりさっきブルンクホルスト先生のレスポンスの中でも出ましたが、やはり世界秩序を維持するのにはアメリカという存在が、存在感が物凄く大きいはずなんです。それが東アジアにおける勢力均衡といいますか、安全の保証、平和維持といった問題に関してもいえると思います。その中で一番脅威になりうる国としてアメリカが想定しているのが北朝鮮なんですけれども、北朝鮮は北朝鮮で、我々韓国の立場から見ますと、それはそう簡単なものではありません。また最後にもう一点、先ほど朱先生は中国が昔に比べて民主主義的な手続きを取り入れたとか、民主国家に向かっていると言うことをおっしゃったんですけど、それはそれで良い事だと思いますが、韓国人としてはもっと中国が民主国家になってくれればと、そういう風に願っております。ありがとうございます。

司会：溝部氏 ありがとうございます。それではデ・プラード先生よろしくお願いします。

デ・プラード博士 どうもありがとうございます。あの、特にブルンクホルスト氏とフィニ氏から返事が来なかったから、どうしようと思ったんですが。でもブルンクホルスト氏の返事は、私にとっても大変勉強になったので、もっとお話して頂きたいと思いますが。

さて、午前中の私の発言に興味を持っていただいたようですし、地域協力の補足的な過程と地域統合についてお知りになりたいでしょうから、特に東アジア共同体についてお話ししたいと思いますし、次に、その問題をもっとヨーロッパやその他の世界と結び付けてみたいと思います。しばらく英語で話させていただき、それから通訳の方々にちょっと助けていただきまして、日本語に移るつもりです。

東アジア共同体という考えは、基本的には日本政府の小泉内閣から出てきたものです。これが提出されたのは2003年のことで、まだたった3年前のことであり、東アジアで起きたものもありま

すし、もっと世界規模で起きたものもありますが、いくつかの多層的な発議に依拠しています。

東アジアにおける多層的な発議には約40年の歴史があります。ASEANの結成は、アメリカやそ

の他の国によって間接的に支持された反共産主義同盟として1967年に始まりました。20年以上にわたり、ASEAN はゆるやかな同盟に過ぎなかったのですが、冷戦後は10カ国に拡大され、最初は経済的、後には社会的なものを含む機能的な問題にまで手を広げてきました。この10カ国は、今ではEUのいわゆる三本柱にも似た三つの領域（政治・経済・社会問題）のASEAN共同体を目指しています。これは、東アジアで公式に語られることの多い貿易、金融面やそれ以外の経済的な側面以上のものなのです。

東アジア共同体の主要な構成国はASEANであるわけですが、この共同体はその目的が広範囲にわたるものでもあります。

午前中の発言の中で、私は、ある種の法的・政治的・機構的な方策が進行しつつあり、2007年にはASEANはシンガポールで40周年記念のサミットを開くことになっており、その際、遠く離れてはいますがどこかEU憲法にも似たASEAN憲章が、ASEANにおける将来の協力の基盤となると申し上げました。それが、主要な機構による、政府レベルのいわゆるトラックワンの過程です。

ASEANの国々は、その地域、またより広く世界的にも他の国々と連携する必要があります。ASEANには重要な対話相手があります。EUは大事なものの一つですが、アメリカ、ロシア、インドそれにオーストラリアとニュージーランドもそうです。しかし、今もっとも大事な対話相手は日本と中国そして韓国です。これら三カ国は、北東アジアでもう一つの地域集団を作り上げようとしています。実際、2003年10月にインドネシアのバリ島で開催されたASEAN会議の周辺会議で、この三カ国は初めてサミットレベルでの三国間協力協定に署名しました。協定は、興味深く、ダイナミックで、柔軟で、将来を見据えた機能的な諸問題について、多少なりとも大臣・次官級レベルで前進しています。昨年2005年12月のサミットでは、主として日中の歴史認識をめぐる共同声明の問題のために一時頓挫しましたが、私はこの問題が北東アジアの国々が全般的に前進するのを妨げるとは思いません。中国と日本の間には、どちらが北東アジア、広くは東アジアの盟主となるかでちょっとした代理戦争のようなものがありますが、私は、両国、いや両大国は妥協点を見つけて前進しなければならないことを分かっていると思います。ですから、東アジア共同体は、本来のASEAN機構が北東アジアと結びついた進展に基盤を持つのです。

しかしながら、多くの機関や委員会を持つEUのように民主的で対話的な空間があるのではないことは認識しておく必要があります。EUにおいては、いくつかのビジネス委員会によって作られたいわゆるソフトパワーは非常に大切なのです。それで、東アジアの問題に目を向けるならば、政府間協議であるトラックワンレベルでは非常に多くのことが起きているのに、市民社会運動がほとんどないことに気づきますと、地域の進展を推し進めているのはいったい誰なのかと思います。これはいまだ少し真剣に研究してみるべきことなのです。私自身はこの問題を多少調査してみました。民間主導のいわゆるトラックツーの進展がここでは基本的にはトラック1.5とでも言うべき進

展になっており、学者・シンクタンクの専門家・リサーチ能力に長けたビジネスの専門家・通常研究機関に属している政府関係者たちが、長年、時にはアメリカにスポンサーになってもらい、時にはヨーロッパのパートナーと対話しようとし、時には国連・世界銀行など多国籍機関のまわりで、そして今は独自に、トラックワンによる進展の周縁に集まってきたのです。現在このトラック 1.5 による進展では、「東アジアビジョングループ」「東アジア検討グループ」「東アジア会議」「東アジアフォーラム」など、きちんとした名称をもつものもいくつかあります。参加者たちは、しばしば極めて明快な政策指針をまとめ上げ、それはトラックワンにいる政治的指導者にも大変真剣に受け取られています。

このことはヨーロッパやその他の世界で起きていることと比較する必要があると思います。民主的・政治的な機構による一連の手立てを持たない他の地域での進展は、ヨーロッパのモデルは複雑すぎるし歴史も長すぎるというので、東アジアのモデルに着目するかもしれません。東アジアモデルは、非常に興味深くなりつつあるある種のソフトパワーを発揮し始めています。ともかく、私は、東アジアのトラック 1.5 の進展が、多くの点でアメリカの制度と両立しないとは思いません。実は、宗教は東アジアの地域の進行ではそれほど重要ではありません。宗教は、私に言わせれば「人間が主導する」ものであり、ASEAN もしくは北東アジアの主要な国々の内部集団が、例えば貿易協定・情報伝達技術・エネルギー、場合によっては農業などの問題を含む経済面での共通の関心がある問題に対して、外部のパートナーと柔軟に協力できるような機能的共同作業に基づいているのです。こうしたメカニズムは、最初は政府間のものであるように思われますが、柔軟な反応を見込んでもいるのです。人を思わず立ち止まらせるような強力きわまる機構を作り上げてはきませんでしたし、ですから、思うに、実は東アジアのモデルは大変興味深く明確なモデルになりつつあるのかもしれないし、多くの機能的な問題については世界の他の地域とも対等であり、十分両立でき、よりすぐれてもいるのです。

最後になりますが、私は、ヨーロッパと東アジアがこのような発展を共同して研究することを強く望みたいと思います。と申しますのも、今日のシンポジウムでも、私が参加した多くの他の討議においても、ヨーロッパのモデルは、実際はヨーロッパで何が起きているのかも知らずに東アジアの人々によって比較のために言及されており、同様にヨーロッパも、東アジアやそれを越えた地域で何が起きているのかを詳しくは知らないまま、世界の他の地域と比較を始めていることに気づいているからです。ヨーロッパと東アジアのモデルは、アメリカのグローバル化計画に対する、部分的にはあい異なった二つのモデルでありますから、世界の多くがこの二つのモデルを研究することに大きな関心をいただくであろうと思うのです。

以上です。ありがとうございました。

司会：溝部氏 ありがとうございました。それでは、時間もございますので、波津先生、よろしくお

願います。

波津氏 5分間という事ですので2点に絞ってお話したいと思ったんですが、2点目がダメなら1点目だけで止める覚悟もあります（笑）。

フィニさんの発言は大変はっきり250年前の産業革命からの汽車の乗り間違いみたいなものを指摘するという非常にラディカルな問題提起でありました。こういう言い方をする人は洋の東西を問わず少ないんじゃないかと思います。ただ、似た問題意識を持っている人は増えていると私は思います。端的な例はですね、EU憲法が去年否決されました。フランスの国民投票でEU憲法が否決された理由は、とにかく競争が強まり過ぎている、それをEU憲法が抑制するんじゃなくて促進する、少なくともそう思われたという事です。EU憲法自体は読み方によってはどうにでも読めるので、あらゆる立場の人が自分に都合良く解釈出来るんですけれども、キーワードとしては競争力のある社会的市場経済を作るんだと、これがほぼ冒頭に述べられております。

競争を重視する人から見れば、これでグローバリゼーションのヨーロッパ版を更に進めるチケットが手に入ったと解釈できますし、社会的市場経済というところに着目すれば依然として社会的ヨーロッパはこれで防衛されるんだという解釈も出来ました。しかし結局フランス国民が選んだのは、前者の、つまり競争が進みすぎる。だから良いんじゃなくてだから困ると。で、フィニさん250年前からの非常に長期なパースペクティブでお話されましたけど、例えばその汽車がで250年間同じスピードで走って来たのではないと思うんです。1929年の世界恐慌以来、世界資本主義は巨大な恐慌は少なくとも経験していません。では、それまでは定期的にあった恐慌がそれ以後どうしてなくなっちゃったのかと……勿論その後第2次世界大戦が始まりますから、その後の10年、20年は異常な事態でしたけれども、戦後も恐慌は起きていない。資本主義を消費社会が救ったわけです。それまでの資本主義が人々の必要を満たすものを主にして物を生産してきたのが、それ以降、欲望に訴えるものが主になって行く、要するに、必要だから何かを買うとかそういう単純な消費ではなくて、例えば新型の車を買ったり最新のモードのファッションで身を固めたい、という欲望が消費の動機になっていく。これは元々からあったでしょうけれども、戦後、全面的に花開いてしまったんじゃないかと思います。必要を満たす資本主義から欲望を自ら掻きたててそしてそれを満たすという自己循環型になってしまったという、これはある意味でその資本主義の極端な加速でなかったかと思うんです。これが環境問題や働き過ぎの問題を生んでいる。で、加速される前の牧歌的な資本主義の時代の方が良かったんだと言う人がおそらく大勢いらっしゃるんじゃないかと思いますが、加速された後でももうちょっと減速してくれればいいと言う人もいるでしょうし、止めるべきであると言う人もいると思います。色んな立場があるでしょうけれども、少なくとも今のスピードでは耐えられないと言う人が相当の数に上って来ているっていう事は間違いないと思います。そういう意味でアメリカニズムというのはおそらくはそのまあ一種の、僕は最初のコメントと称する

お話の中で、非常に特殊なアメリカのキリスト教原理主義のお話をしましたけれども、その意味では今のグローバリゼーション、ある意味でアメリカニズムの同義語みたいに見られているこの考え方というのは、言ってみれば欲望の宗教と言いますか、反論することの許されないイデオロギーの様な、宗教の様な、まあ定義は色々在り得ますでしょうけれども、そういう物になってしまっているんじゃないかという気がします。そういう意味ではその存立の根本から疑うということは、結論がどう出るにせよですね、これからも続ける事が必要なんじゃないかと思います。あと1分30秒くらいなんですけれども、第2の論点にごく簡単に触れたいと思います。これは日本の事なんです、僕は日本のジャーナリストとしてはおそらく日本の現実をもっと内在的に含む様な形でテーマを提起すべきだったんじゃないかと、反省している面もありますので、日本の問題に言及しておきたいと思ったわけです。その欲望の宗教みたいなものは勿論、フィニさんがおっしゃった通りこれは日本人も共有しているわけなんですけれども、日本的特質としてもうひとつ、非常に極端に走ってしまった開発の宗教というのがあるんじゃないか。例えばですね、非常に卑近な例ですけれども、さっき僕自動車やファッションの話をしました。で、日本の場合、モデル・チェンジは自動車やファッションに限らず、建物、住宅含めて、街、国土そのものがまるでファッションの様にですね、立て替えられていく、更新されていくのです。これが恒常的に行われる様になったのは戦後です。例えば住宅の平均寿命、日本はわずか26年です。アメリカが100年、イギリスが140年と言われてます。日本の中にもアメリカニズム批判、グローバリゼーション批判はありますけれども、アメリカだって造った建物は100年以上持たせます。それを26年で壊してしまう日本人がですね、アメリカ的な消費文明を批判する権利があるのかという、別の論点がここで成り立つと思います。その町自体が破壊されているというのは皆さんご存知の通りで、京都自体がもう昔の歴史的都心と言いますか、本来の京都の姿はほとんど消滅しています。あるのは点です。例えば清水寺が美しい、金閣寺が美しい、でもその間ほとんど新建材で出来た寿命26年の建物で埋め尽くされているわけです。で、この様な状況はもうアメリカニズムなどを批判している様なレベルの話ではない、ジャパニズムを批判しなきゃいけないんじゃないかと……話がちょっと妙なところに行ったかもしれませんが、以上でございます。(拍手)

司会：溝部氏 ありがとうございます。それでは続きましてフロアからの発言に移ります前にですね、時間が最終的には迫られておりますので、本当のショート・ブレイク、5分間のショート・ブレイクをおきたいと思いますので、どうぞコーヒーなどをお召し上がり下さい。

(休憩)

司会：溝部氏 それでは再開をしたいと思いますので、ご着席をお願い致します。時間の進行にご協力をよろしくお願いします。フロアからもたくさんの発言のご希望を伺っておりますが、予め日本

的に3人の方に発言をお願いをしております。川北稔先生、木村雅昭先生、三輪公忠先生のお三方に発言を依頼しておりますので、まず、その方々から発言なり、コメントなり頂戴したいと思います。それでは、川北先生お願いいたします。

川北教授 川北でございます。よろしくお願い致します。私はこの企画をお聞きするのが大変遅かったものですから実は都合が付きませんで、昨日は出席できませんでした。大変申し訳ないんですが、ペーパーは読ませて頂きましたので、少し感想などを述べさせて頂きたいと思います。私は歴史が専門でございまして、現代の問題を扱っているわけではございませんので、言う事がかなり大雑把になるかもしれません。ご了承いただきたいと思います。ブルンクホルスト先生とフィニ先生のペーパーは、いずれも非常に興味深く拝読いたしました。両先生の現状についてのご意見はかなり相違点があるという風には思いましたけれども、しかしいずれも了解可能といいますか、理解できるものでありました。ブルンクホルスト先生は、私の誤解でなければ、現在進行しているグローバリゼーションというものが、アメリカナイゼーションと少し違う部分がある……、国際機関であるとかですね、国際的な協定だとか、条約だとかそういったものによって、特定の国、つまりアメリカの完全な支配下にはない様な運営の組織なり、法体系なりが、整備されて来つつあるというお考えではないか、と思いました。グローバリゼーションの傾向とか、私が一番関心を持っております世界システムの近未来像についての、一番穏やかな理解の仕方であるだろうと思います。そうなればいいなあと私も思いますけれども、しかし本当かなあと言う所もちょっとある……まあ日本の京都の様な所に座って世界の情勢を考えておりますと、なかなかそういう風には行かない所もあって、現実グローバリゼーションというのはすなわちアメリカナイゼーションにかなり近いところがあるのではないかと……。イラクの問題が発生しました時に、エルバラダイが力を持っていたのか、アナンが力を持っていたのかというとそうではなくて、実際の歴史はやっぱりブッシュの判断で動いて行ったという所がある様な気が致しますので、ブルンクホルスト先生のご意見は、国際法学者としての難しい所はよく私も解らないのですけれども、全体のお話は非常に心安らかに伺うことが出来ましたが、どうもそれで良いのかなという、本当かなという印象もちょっと持ちました。一方のフィニ先生のお考えは、実は特異な考え方であるという様なご発言もありましたけれども、私は非常に共感を持って読ませて頂いたものでございます。私も非常に長いタイム・スパンの歴史を考えております。現在グローバリゼーションを起こしている世界システムの、一番大きな特徴というのは何かと言うと、これはフィニ先生の文章の中に所々出て参りましたけれども、成長至上主義というか、パラノイアという言葉も出てきたと思うんですが、私は実は、自分自身かねて「成長パラノイア」という言葉を使っているわけです。常に右肩上がりに物事が成長して行かなければならない、そうでなければ倒れる、これが16世紀以来の近代世界システム、すなわちヨーロッパあるいはユーロ・アメリカン・ワールド・システムの、非常に大きな特徴であると考えておりま

す。コメンテーターの一番最後の方も同じような事をおっしゃったんだと思いますけれども、欲望を無理に掻き立てても、右肩上がりに経済を成長させて行くという、そうでなければ倒れてしまうという、それが今の世界システムの特徴であるだろうという風に考えております。そうしますとこのシステムは永久には持たない、簡単に言うといつまでも持つはずがないという所があるわけで、そこが現代の一番の問題なのであろうと思います。ブルンクホルスト先生のお考えは先ほど申し上げました様に非常に穏やかで、多分そういう形で世界が追隨していけば、当面非常に良いとは思いますが、しかしあえて言いますと、じゃあそのグローバリゼーションを推し進めている力っていうのは一体何なんだろう、それはどこかでストップするのか、その推し進めている力がいつまでも働き続けるのかどうか、世界は何によって動かされているのか、そういう問題がいつもあると思うわけです。そこを考えると、この成長パラノイアを考えざるを得ないように、私には思えます。それで、そうなるとうどこかで行き詰まると言う事で、歴史のやや長期的な見方としては、私はフィニ先生のお考えに同意しますが、それではフィニ先生のご議論は非常に説得的であるかと言うと、多少の疑問も湧きます。説得的な所もあるんですが、現状の説明であるとか、あるいは現状に対する批判の力はかなりあると思いますけれども、しかし、じゃあどうするんだという、政策論といいますか、現実政策の話になると何も回答がない、「このままではあかんよ」と言ってるだけの話になってしまっている。ここが非常に難しい所でありまして、これから世界がどこへ向かって進んでいくのか、次の世界というのは何なのか、どんなものなのかと言う事が見えない、ここに我々の議論の一番の弱点があるという風に考えております。もし次の世界、何か今の世界が行き詰まって次の世界に行き当たるとすると、そこは「成長パラノイア」からは自由な世界でないといけません。そこまではいろいろな人が考えているわけで、例えば持続可能な社会とか持続可能な成長という様な事が、現在はもう政治の世界でさえも言われているわけでございます。しかし、持続可能な成長というのは本当にあるのかと言うと、それは時間の問題であって、つまりデッドロックをずっと後ろに延ばすというだけの話で、原理的にはそれは右肩上がりの成長と同じ事です。ですからここには答えが見出されていないという事が、フィニ先生の様なパースパクティブの場合には一番問題なんじゃないかと存じます。それは、私自身の問題でもあるんですけども、そういう風に考えております。私は歴史を勉強しておりますので、この近代世界システムというものは、基本的に成長パラノイアの世界である、しかし、他の世界システムもそうであったのかどうか、つまり成長パラノイアからは自由な世界システムというのはどこかにあったんじゃないか、ということが気になっております。伝統的な中国の世界システムは帝国という構造をもっておりますけれども、その世界は成長パラノイアにさいなまれていたのかどうか。13世紀の世界システムなんて事がよく言われますけれども、モンゴル人の世界システムは、あれは地理的な拡大意欲は物凄くあったと思いますけれども、我々が言う様な意味での、経済成長を絶対視する様な考え方がそこにあったのかど

うか。そもそも経済成長という概念があったのかどうか、そういう事が大変気になるわけでございます。近代世界システムそのものではなくて、こういう成長パラノイアを含まないで、成長パラノイアからは自由で、別の価値観を持っていた世界システムというものがどういう在り方をしていたのか、それが研究されなければいけないのではないかと言う事を、最近はお考へているわけでございます。最近の歴史学界では、アジア史、特にアジア経済史の研究が非常に盛んになっております。これは、現実の世界でアジア経済が非常に活況を呈しているという事実から来ていると思うのですけれども、ただその場合には、残念ながらアジアもヨーロッパやアメリカと同じ様に経済成長が出来るんですという所にポイントが置かれてしまっておりまして、「成長パラノイア」を逃れた発展が何かあるという風な形にはなっていない。アジアは凄いですよと言う事があちこちで言われますけれども、それは実はかつてはヨーロッパがやった事を今アジアもやっていますよ、という、そういう事になっているんです。これでは、結局ヨーロッパから始まった世界システムの枠の中に我々がまだあるということで、そうするとその行き詰まりを共有するだけになってしまうと言う事になるのではないかなと思います。だから少し別の世界を我々が提示できないと、我々の言っている事はあまり説得力を持たないのではないか、という印象を持っているわけでございます。東アジアなどについては、狭間さんなどが後でご発言になると思いますので、私が言う事ではないですが、フィニ先生のパースペクティブでは、アメリカのヘゲモニーに対抗して、ヨーロッパが結束をすべきであるとされております。それで、東アジアも結束をすべきであるという様なお考えかな、という風に思いました。それからブルンクホルスト先生も、東アジアの統合の様な事をむしろプラスとして見ておられる様に思われます。それはそれで良いのですが、実際のアジア人の立場から言うと、東アジアの統合という事は非常に難しい問題であるとも思います。私も色々な人にこういう話をしましたけれども、ほとんどそれは無理だと言う人ばかりで、積極的にやれると言う人はなかなかいないと思うんですね。その場合に広く言われております事は、文化の違いであるとか、つまりヨーロッパはキリスト教世界であったけれども、アジアは違うとかですね、あるいは戦後処理の問題といいますか、具体的には靖国問題などといった、非常に具体的な問題があげられるわけですが、しかし私はもう少し違うところが重要かと思います。ヨーロッパの統合過程を観て行きますと、一番決定的な事はヨーロッパ 石炭鉄鋼共同体 (ECSC) が形成された。これがもう決定的な事だったと思います。長年戦争をしてきましたドイツとフランスがエネルギーを共有するという、決定的な事をやったわけで、実はアジアの統合も、もし進むとすれば、まず最初の第一歩はこう言う形だろうと思います。文化の違いとか、そんな物は極端に言えば後回しでも良いかもしれないと考えておりますが、まあこれは専門の方が、それぞれにおっしゃるのではないかと思います。私としては歴史の研究をもう少し何か変革して、現実の政策に具体的な提案が出来るような研究がしていけるといいなと思うんですが、現実の歴史研究はなかなかそうはなっておりませんので、まあ、そこが問

題なのかなあとは思いますが。現実の日本の政策はやはり市場原理主義が非常に強力になっておりますから、やっぱりアメリカナイゼーションという形で現実には進行している、という風に今考えております。結局フィニ先生の理解であると、近い将来はアメリカを中心とした勢力と、それからEUと東アジアなどの、ある種の広域のまとまりがベースになって世界が全体として構成されて行く、そういうのを理想としておられるのかと思いますし、ブルンクホルスト先生の理解から言うと、これは国民国家が相変わらず多少ベースにはあるのかなと思いますけれども、国家を超えた形で、特定の国がヘゲモニーを持たない形での国際機関や国際法などといったものが世界を支配する……まあある意味では非常に緩やかな形の世界政府が出来るという風な事をお考えになっていらっしゃるのかなあと思います。この二つは、どちらもありそうな事ですけれども、なかなか実現が難しいのかなという様な漠然とした印象でございます。ありがとうございました。

司会：溝部氏 どうもありがとうございました。申し遅れましたが、川北先生は大阪大学の名誉教授で、現在は本学の客員教授でございます。世界システム論の見地からイギリス産業革命を研究された、西洋史の大家でございます。

それでは続きまして、木村雅昭先生をお願いをしたいと思います。木村先生は今月末まで京都大学教授でありまして、インド史の社会構造でカースト制度を研究され、それから最近では『大転換の歴史社会学』という、比較政治学的な見地から近代化を研究された大著を公刊されております。この4月から本学教授に就任される予定になっております。木村先生よろしくお願い申し上げます。

木村教授 それじゃ、短く申し上げます。2つでございます。私の印象ではアメリカニズムに対して、昨日は特にシビア、今日は少しマイルドになりました。その一方EU、及び東アジアに対しては非常にオプティミスティックなパースペクティブが展開されたと思うんですが、それについて私はもう少しペシミスティックな見方を提示したいと思います。まず、東アジア共同体でございますけれども、私自身も実現は困難だろうと思います。理由は色々ありますけれども、2つ指摘致します。1つはですね、中国が地理的に大き過ぎるということ、それから将来、経済的にも政治的にも巨大になりすぎる可能性があるということ。、こういう所では地域共同体っていうのはうまく行かない。例えば、南アジアで地域共同体を作ろうとしたんですけども、インドが大き過ぎて結局の所うまく行かなかったんですね。それがまず1つ。それからもう1つは、ヨーロッパと東アジアの過去3世紀から4世紀間の歴史の違いです。具体的には1648年のウエストファリア条約以降、ヨーロッパは主権国家が相対峙する国際システムをとってきたのに対して、東アジアにおいては100年ほど前まで朝貢システムでした。これは英語ではtributary systemというのでしょうかけれども、中国を中心とするパクス・シーナで、全然歴史的なスタンスが違います。こういうところで共同体を作るとなると周辺諸国に大きな警戒感を引き起こすのではないかと思うわけです。それからEUについてでございますけれども、私自身、EUはアメリカに対抗するグローバル・パワーになり得るかって

いう事に関して、かなり批判的です。というのは、EUのシステムに一種のパラドクスがあるという事です。それはどういう事かと言えば、EUが拡大してゆく過程で新しいメンバーをインテグレートする必要が増大する。つまりEUは大きくなればなるほど、インワード・ルッキングとなってゆかざるを得ません。そういう風な一種のパラドクスであります。グローバルなパワーにはなり得るかどうかって事に関して、疑いがあるということです。それからもう一つは、EUの組織としての一体性に関してです。これはブルンクホルスト先生の議論に関係するんですけども、先生によれば近代資本主義に代表される機能システムを国民国家が統合してきた、ところがグローバリゼーションの結果、その統合が必ずしもうまくいなくなってきた。そこにグローバル・システムの問題があるというわけです。同じようなことがEUに言えるんじゃないか。つまり端的に言えばEUが国民国家と同じように機能システムを統合することが出来るか、それだけの組織としての凝集性を有しているかということです。より具体的に言えば、一口に国民国家といっても、例えば19世紀の国民国家はまさにマルクスが分析した様な階級国家の色彩が非常に強かった。で、それが20世紀になってデモクラシー、シビル・ソサエティー、あるいはナショナリズムといったイデオロギーや観念が力を持って来た結果、非常にパワーを持つに至ったわけです。そういう風に考えるとEU自身にグローバリゼーションを飼い慣らす力があるかどうかという事に対して、私自身はそれほど楽観的ではない。もしそれがなければ、EU自身の中で、様々な問題が出てくるのではないかな。例えば階級支配、つまり一握りのエリートと大衆との対立、過度のロビーイング、あるいはドイツやフランスといった国がヘゲモニックパワーを持つといったことです。他にも言いたいことはたくさんあるんですけども、皆さんお疲れでございますから、以上で終わらせて頂きます。

司会：溝部氏 ありがとうございます。それでは続きまして、三輪公忠先生をお願いをしたいと思います。三輪先生は上智大学生え抜きの、日本政治外交史をご専攻のこの方面では大家の先生でございまして、昨日来このシンポジウムにご参加下さいました。それではコメントを頂戴したいと思います。

三輪教授 上智大学から参りました、もう退職してから5年になりますけれど、ずっとこういう様な問題に関わって参りました。素晴らしい、新しい情報をたくさんお聞かせしていただきました。そのモザイクの中に私の持っている情報を埋めてみたら、さらに少し何か変わった物が見えてくるのではないかと思います。日本人について言う前に、アメリカにとって地続きのカナダとメキシコについて一言触れてみます。カナダはある意味で、非常に「アンアメリカン」であり、時として「アンティアメリカン」でさえあります。文化的にはそれを意識的にやって来た国です。ベトナム戦争の時にはアメリカの若者達がここに逃げ込んでいます。ベトナムに行って人殺しをしなくていい選択をしたわけです。そのカナダについてアメリカ人がどれだけ関心をもっているかを大学レベルの教材で見えますと、ちょっと信じられないような結果が出ます。アメリカ史のこんな厚い本がい

くつかあるわけですが、カナダの学者が調べたところインデックスで“カナダ”と見ると六つくらいしか出てこない。ところがカナダにおける、“History of Canada”というようなカレッジ向きのテキストでインデックスを見ると、United States と言ったら100くらい出てくる。それほどにまで隣人の捉え方が違うんですね。同じようなことが日米間にも言えるのではないかと思います。ついで南で国境を接するメキシコに対してアメリカは何を知っているのかと言えば、不法移民問題が際立っているといえるでしょう。そこには人種差別の問題が包含されています。日米間にはカナダとアメリカの間のような、知識人の間でさえ関心の格差の大きさが観察されるでしょうし、同時にメキシコとの関係に見られるのと類似した人種差別の問題が認識されるでしょう。一口で言えば、日本人のアメリカニズムに対する姿勢は、この「人種主義」の周りに展開してきたといえると思います。これはEUとアメリカとの関係の中では起こり得ない問題ですが、日米関係の中では非常にベーシックでありました。ヴェルサーユ＝ワシントン体制下の平和の1920年代、軍事力の均衡のもとに築かれていた日米英仏という太平洋東アジア地域の4大植民地「帝国」国家の平和協調の最中に成立実施された1924年の排日移民法をめぐる日米関係の緊張は一つの典型的な事例でしょう。問題は日露戦争直後の1905年にサンフランシスコ市が取った小学校の日本人生徒排除にすでにその原型がありました。普通のアメリカ市民が日本人は性的に非常にインモラルだ。白人の子女に害が及ぶという。日本人がリンチにあう。サンフランシスコの裏山で惨殺される。そういうことが日本の新聞に載り、日露戦争に勝って、「白人」と同じ国際的ステイタスを獲得したと自負している日本人を激怒させるわけです。『日米もし戦わば』といったような報復劇の著作が売れました。一方では、『日米の新関係』という本も著名な国際法学者によって書かれています。その言わんとするところは、「昨日までの日米関係は叔父と姪の関係であったが、今日からは対等である」というものでした。そして1924年、排日移民法が成立したときには、東京帝国大学のエリート学生までも含んだ「愛国者」集団が、「自由の女神聳え立つ、旧アメリカは亡びたり……」と関東大震災で大使館が破壊したアメリカ大使館の館員も多数舞い踊っている帝国ホテルの舞踏場に、抜刀して踊りこみアメリカの非をなじったりしたものです。

プリンストン大学にアメリカ史研究のアーサー・リンクという大先生がいました。或る時リンク先生がフランスのアメリカ学会に招待されて、ソルボンヌ大学でフランスのアメリカ研究者に講演することになりました。フランスのアメリカ学会の会長さんが、“全員集めておきました”という様な事で、大きな会場に行きましたところ、壇上に立ってみるとせいぜい12、3人しかいなかった。つまり、アメリカ合衆国の歴史は、ヨーロッパでは歴史の研究の対象にはならなかった。それと同じで日本でも戦前には「アメリカ研究」なんてのはなかったわけです。全て「西洋史」の中で、イギリスから独立したアメリカということで話は終わってしまうわけですね。それでも日本人にとってのアメリカは、もう一つの学べき文明の形。かつての中国にかわるものでありました。ディシ

ニフィケーションのために選ばれたアメリカ文明でした。ヨーロッパの文明も勿論在ったわけです。しかし第二次大戦後の日本ではアメリカ中心になりました。そのとき日本人の意識の中に何があったかという、少し古いところから考えますと幕末開国後のアメリカは日本にとって大変好ましい文明であったわけです。幕末の鎖国時代に鯨漁船に乗って漂流して、アメリカの船長に助けられたジョン万次郎の境遇を思い出してみてください。ニューイングランドに連れて行かれたこの日本人少年はこの船長さんに生涯忘れることの出来ない大きな恩を感じました。何故かと言うというと、この船長さんは自分が救った日本の少年漁民、15、6歳でしたか、万次郎を連れて自分の教会に行ったわけです。すると顔見知りの信者までがこんな東洋人を入れるわけにはいかないと言うのです。この人種差別をアメリカのキリスト教はまだ克服していなかったわけです。するとこの船長さんはどうしたと思いますか。それなら私もこんな教会はおさらばだ、と言って少し遠いのですが、別の教会に通い始めたのです。アメリカは建前はキリスト教文明の国ですが、その中にはキリストが顔を背けるような非キリスト教の人間も結構多くいるということです。何て言いますかね、独善的なアメリカ中心主義、白人中心主義のえせクリスチャンがいると言う事です。日露戦争中、ロシアの捕虜がたくさん日本に連れて来られました。そうしますとこれは四国なんです、四国の松山でシドニー・ギューリックというアメリカ人宣教師が10何年も宣教しておりまして、その人が教団本部に手紙を書いて、自分が宣教をしてる町で普通の日本人、クリスチャンでも何でもない人達が、ロシアの捕虜達に対して非常に人間的に付き合っていると……。クリスチャンでない日本人の方が、クリスチャンであるアメリカ人やロシア人よりもずっとキリストの教えに適う博愛主義者である。日本政府がいくら要求してもロシアは2千人の傷ついた日本人の捕虜を返してくれない。そしてやがて全部死んでしまう。それに母国アメリカでは、黒人であるというだけで、実際犯罪を起こしたかどうかわからないのに、裁判にもかけず、木に吊るして殺し、そして火を点けて燃すではないか。これがアメリカのキリスト教である。日本人はキリスト教徒ではないけれど、もっと博愛の精神があると言葉を尽くして言っているのです。これは日露戦争のときの事なんです。ところで日本人はそういう褒め言葉におおいに国民的に自信を深めて喜んでおりましたが、世界的に日本はこういう風に捉えられていたかと言いますと、それより10年前の日清戦争時にこんなことがあったのです。これ、朱先生がそこにいらっしゃいますので、朱先生に特にお聞かせしたいのですが。私が非常に貴重な情報だと思って大事にしてる歴史のひとつです。

1894年、日清戦争中のことです。ニューヨークの『ワールド』紙、イエロージャーナリズムでよく知られているピューリッツァーの新聞ですね、その特派員としてクリールマンという新聞記者が、朝鮮半島を日本軍と一緒に進み旅順に入城したわけです。その時いわゆるその日本軍による「旅順の虐殺」を目撃します。旅順は国際都市ですから、各国の総領事とか領事とか皆やって来て、虐殺現場を観ています。そして皆がアグリーした数字は2千人、2千人の市民を虐殺した。そこには女

も子供もいた、と。クリールマンは早速記事を書き、日本の参謀本部の無線を使って横浜経由でバンクーバーに、バンクーバーからニューヨークへと情報が行く。そうやって虐殺の様相がアメリカへ世界へと流れていきました。その新聞を今日読んでみて、これは凄いと私は思いました。このアメリカ人記者は「文明」の名において、日中両国民を断罪しているのです。大体日清戦争という1894年から5年の戦争のことを、日本ではクリスチャンを中心にこれを「文明」の「野蛮」に対する戦争としていました。その文明は何かと言うとアメリカのプロテスタントのシビライゼーションのことで、これを日本が朝鮮半島へ、そしてそこを通して「野蛮」の国、中国に伝播するのだと捉えていました。国際法を遵守して、文明の戦争らしくやったんですね。行く先々で捕虜はちゃんとって日本に送って、普通に町も歩けるくらいに扱ったんですね。ところが旅順では虐殺がおこってしまったのです。日本の外務省もすぐに確かに2千人殺しました、しかしそれは婦女子ではなくて軍服を脱いだ中国の兵隊でしたと弁明しました。ところがクリールマンの報道記事はこう書いていたのです。「昨日までの文明の仮面を日本軍はかなぐり捨てて野蛮になった。野蛮が文明になるのには一世代ではだめである。日本人も中国人と同じ野蛮だ。日本の兵隊が怒り狂って虐殺したのは、理解出来る。何故かと言って旅順に入城した時に中央通りに日本の捕虜の兵隊の首や手がばらばらになって吊るしてあった。だから日本の兵隊がそれを見て、あ、俺の戦友がこんひどい目にあったと言って、怒り狂い虐殺に及んだのである。とは言っても文明ならこんな事はしない。野蛮が文明になるのには一世代では無理だ」と。私はこのクリールマンに聞きたい。日清戦争をさかのぼることわずかに4年の1890年に起こったサウスダコタ州ウーンデッドニーのインディアン虐殺のことをどう説明するのかと。白人の騎馬警備軍500名あまりの勢力で、350名ほどの婦女子を含む原住民を、真冬の凍てつく谷間に集め、小高い周辺の山から砲火をあびせ、その過半数を死傷せしめたあの事件のことを。それこそ「正義」も「人道」もここにあればこそ。先住民を劣等人種として扱いジェノサイドに及んだあの殲滅作戦を。いくらかの良心が残っていた白人のうちにはクリスマスの飾りつけのまだ残っている付近の教会堂に生き残りの負傷者を運び込んだ者がいたとはいえ。

最後に一言、日米戦争に負けた日本人の占領下での対米協力のことを。コラボレーターとコラボレーショニストと呼んで区別できる者がいたわけです。これはイラクと大違いだと思うんですけども、日本ではアメリカの価値に大賛成人がいて、これはコラボレーショニストです。信念において占領協力を徹底的にやった日本人インテリや政治家がいたわけです。その反対に、日和目的に、まあしょうがないじゃないか、占領が終わるまでの一時を、嵐が吹きさるまでとアメリカに協力し、占領の終息と共に憲法も何も思うように変えればいいという人々です。太平洋戦争後の日米関係はそんな特徴をもっていたと思います。そしてそれは今日にまで及ぶ日本人の基本的姿勢ではないかと思います。つまりアメリカの「自由」を高く評価しつつも、その暴力的権力行使に対して、批判

的であるというアンビバレントな姿勢です。ではこれで私の発言を終わらせていただきます。

司会：溝部氏 どうもありがとうございました。最後のコメントは、本学の理学部の著名な素粒子物理学者であります、曾我見郁夫教授から、一つ理科系からのコメントという形でこの問題に参加して頂きたいと思います。手短によろしくお願い申し上げます。

曾我見教授 ありがとうございます。発言の機会を与えて頂きましたことに感謝します。

私は、物理学を研究しており、このシンポジウムの参加者としては異質な例外的な存在です。そこで、敢えて物理学的な視点にこだわりながらシンポジウムへのコメントを述べようと思います。

物理学の基礎の一つに、慣性（Inertia）という概念があります。すべての物体は、外部から力を受けられないかぎり、その運動状態を持続するという普遍的な性質を持っております。これがガリレイとニュートンによって発見された慣性であり、非常に大事な概念です。もちろん、このような自然科学で確立された概念が、そのまま無条件に国際政治で扱われる個々の対象や事象に適用可能であるとは、私も思っておりません。しかし、たとえば我々の寿命を越えるような長い時間スケールで見た時には、国際問題に関わる諸問題にも根底を貫く『慣性』と呼ぶべきものが存在するのではないかと私は感じるのです。たとえば、このシンポジウムのタイトルには、「反アメリカニズム」という表現があります。ここでいうアメリカは、20世紀の全歴史を通して外部から力を受け続けて変容してしまったアメリカの現在の状況を指しています。つまり、第一次大戦と第二次大戦と冷戦に否応なく巻き込まれてしまった結果として、巨大な『慣性』をもってしまったアメリカ、そのアメリカをヨーロッパから見てどう捉えどう対峙するのか、それがこのシンボウムの主要テーマだったと思うのです。

この課題に対して、報告者の一人であるブルンクホルスト先生は、グローバルな国際的組織とそれがもつ法体系を可能なかぎり肯定的に見て、アメリカのもつ巨大な慣性にある種『寄り沿い』ながら、その荒々しい慣性の発現を緩やかにスローダウンさせて行こうというスタンスであろう、と私は解釈しました。それに対して、もう一人の報告者であるフィニ先生は、もう少し対立的ですね。アメリカの圧倒的なプレゼンス、それが機関車、暴走する機関車と表現されています。その暴走する機関車をスローダウンさせるには、ヨーロッパを何らかの形で切り離すしかない。そのために、ヨーロッパの再編とある種の孤立主義を提起したのだと思います。確かに、巨大な慣性の発現を押さえるには、それを分割し分離することは有効な方法の一つです。問題は、如何にして、それを平和裡に達成するかにあるのでしょう。お二人の主張を聴きながら、「反アメリカニズム」を論じるには、『アメリカが巨大な慣性を持つに至った責任は我々にある』ことを忘れてはならないという思いを強くしました。

コメンテーターの方々のお話しも、興味深く聴かせていただきました。ここでは一つだけ、三島先生のコメントについて触れたいと思います。第二次大戦が終わってもう60年経つわけですけど

も、日本と中国そして日本と韓国（北朝鮮）の間には今も尚、戦後処理を巡って様々な軋轢があります。この難しい問題に対処する教訓として、三島先生は、ブランド首相のワルシャワ訪問の意義を指摘されました。「ゲッソーの記念碑の前で雨に濡れながら地面にひざまずいたヴィリー・ブランド」の姿が、ドイツとポーランドの融和に決定的な役割を演じたという指摘です。巨大な力を受けて動き出したシステムが方向転換するためには何が必要なのか？ 歴史の一部分となってしまった大きい慣性を賢く制御するには、心を尽した真に人間的な行為が示されなければならない。どのように冷徹なる歴史的な問題も、人間の生み出したものであるかぎり、その解決には真に人間的な行為をもつてのぞまなければならない、というご指摘でした。ブランドの行為が教えるもの、その「政治的象徴」として意義を、非常に感銘深く伺いました。

この2日間のシンポジウムに参加して感じたのは、皆さんがたいへんお話し好きであることです。しかも、雄弁であられる。しかし、雄弁に物語られる長い長いお話しの中に貫徹する（であろう）ものを理解しようとする、これがたいへん難しい。恐らく、そこに政治思想や国際政治のような学問の難しさがあるのでしょう。難しい学問を研究されておられる方々に敬意を表すると共に、いささか疲れたという正直な気持ちをお伝えして、終わりにしたいと思います。

司会：溝部氏 ありがとうございます。それでは、最後の総括的なコメントを、狭間直樹先生から頂戴を致したいと思います。狭間先生は長らく京都大学で中国史の教授として人文研で活躍をされて参りましたが、現在では本学の教授でございまして、本シンポジウムのまあいわば最後のコメント役として早くから予定をしておりました。狭間先生どうぞよろしくお願い申し上げます。

狭間教授 狭間です。8時間から9時間くらいに渡ったと思いますが、2つの報告、それを巡ってのコメント、それに対する答え、等々何重にもかさなったこのシンポジウムの総括的なコメントをするのは大変に難しいことだと思います。私自身は、こう重層的な会というのは初めての経験でございます。おそらくはしょって話す事になって、誤解やあるいは発言者の方の意図はそうではなかったということもあるかと思います。しかしまあ、その点はお許し下さい。そうでないと20分では到底何も喋れませんので。おそらく今回のテーマは、まあ大きくというか少し長いスパンでとれば1989年の大変化、そしてまた2001年9.11以降の数年の大変化、これを踏まえての設定であろうと思います。私自身は世界問題研究所員ではありませんので、ちょっと最後に関わっただけでございますが、皆さんの発言では、アメリカの覇権云々という言葉がいろいろと使われています。まあ中国流に言えば霸道であります。そういう点でのまあ大いに人々が憂慮する状況というのが明らかに生まれていると思います。ですから、これからの世界を考えるにあたってその問題をどうしようかということで、このテーマが設定されたとは私は理解しています。その場合に一つの軸として、ヨーロッパからするアメリカ観と言うか、反アメリカニズムという事で、現在の国際政治の状況を斬ってみようという事で、それが出されたんだと思います。2つの報告があり、そして6つのコメ

ントが行われました。しかし7つもの国々の人が、人文社会科学ということでは同じですけれども、違う分野の方が色々の話題で話されたのですから、同じ言葉を使っているとしても決して中身が一緒であるとは言えないと思います。しかしまあ、おおよそその所で皆理解しながら議論を進めて来たというか、話を聴いてきたと思います。一番中心的な概念、アメリカニズムというタームでも、私が聴いている限り多くの方々、人々の含意は決して一致してなかったと思います。それはまあ仕方がない。アメリカニズムというものを大きくとって、その一部分をそれぞれに自分の議論に組み込んでおられたと私は理解しました。ですからやはりアメリカニズムという事の言葉の生まれ方あるいはその後の変遷を本来なら押さえておきたいという風に思います。ロマノ先生に伺いましたら、やはりアメリカニズムという概念はアメリカ独立の前後に既に生まれている、そしてその場合当然、立脚基盤はヨーロッパに対するアメリカなんですね。そうでないとおかしいと思うんです。というのは、我々の場合でしたらアジア主義という言葉があります。このアジア主義という言葉はやはりアジアが近代に向かうようになった19世紀の後半に生まれます。ヨーロッパ主義はないのに、アジア主義が生まれる。何故か？ ヨーロッパに対してアジアをどう、同定するかの話だからです。後の大アジア主義が大変、変なものになってしまいましたから、今では語られなくなっている。しかし、明治の初年に生まれたアジア主義は決してそんなものではありません。ヨーロッパに対抗してアジアはどうすべきか、という事を本気で考えた。その場合の日本の唱道者達はこんなことまで考えています。ヨーロッパが強いのは英語という共通言語を持っているから。だからアジアも対抗しようとしたら共通言語が要る。共通言語として今役に立つのは何か？ 明治の初年ですから、唱道者の考えでは、それは北京官話、漢文である。だから我々の雑誌は全部漢文で出そう、という事になります。これ、明治の10年代、自由民権華やかな時代です。ですからそういう動きがあった。それに対応する中国の側の動きは省略しますが、そういうことがあって、こちらではアジア主義というものがある。アメリカニズムはかなり早く生まれて、その後既に2世紀以上経ってるわけですから、その間に内容が大きく変化して、今日みなさんがいろいろに使われたような側面を皆含んだものとして、我々の頭の中に浮かんて来るのではないかと思います。その場合には当然に、アメリカニズム・反アメリカニズムが親米・反米という様なところまでシフトしている、というようなことまで起こっていると思います。まあしかし、それも一つの側面であったと思います。というようなことからですね、各人各様に報告・コメントなされたと思いますが、しかし、やはりアメリカの覇権主義というか、そういうものが現在世界的に大変に危ない状況を招こうとしてるのではないか、ということはかなりの方に共通であったように思います。中にはそういう問題じゃない、覇権だ、国際法だということ自体が神話であるとアメリカの方から言われて、「ああ、アメリカの方はこの様に考えておられるのか」ということの発見は、私にとって大変に啓発的でした。それが、どちらが良いということはとりあえず抜きにして、そういうふうに私は感じました。そういうアメリカの背

景、問題の背景をですね、波津先生が語られました。ところで、議論の元となった二人のご報告はやはり19世紀以前において生まれたものであるとは言え、現在の状況を踏まえてのご報告でした。ブルンクホルスト先生の意見は要するに、歴史は進歩するという観点、これは現在の状況としては国際機構・国際法というものを軸に再編成すると言うか、そこで問題を解決すると言うところに力点があったかと思います。それに対してフィーニ先生の意見は、生活を根底に据えてですね、何もその、たんに過去へ戻ろうと言うのではない、破局を避けるためにはやはり現在、調和という事を考え直さねばならない、と言う主張であったと私は理解しました。自給自足という言葉に私は少しは尻込みしましたが、自給自足という言葉は勿論、字義どおり使っておられるのではなく、地域的な自立体制に近いようで、言われんとしていることは解りました。そういうものを踏まえて、ヨーロッパあるいはアメリカとの関係性の問題ということを機軸に現代世界の根本問題を提起されましたが、加えて西洋と東洋の問題が、当然にその系として出てきました。それに繋がって今度、東アジア内部の問題ということも、相当に議論が為され、その東アジア内部の問題は結局、東アジア共同体とEUモデルというようなところに、かなりの議論が集中しましたが、それには皆さん、おおむね否定的であったと思います。実際、それでいいのではないか。しかし、中国や韓国のコメンテーターの方が、その東アジア的なものということ、それなりに自分達の問題に引き寄せて考え、色々議論されたこと、これはやはり大事なのではないかと思います。あるいは、デブラード先生が、知識を武力に優越させようというようなことを提案しながら、これは東アジアでもやれるであろうということまでおっしゃって頂きました。そう言うものも全て踏まえて、やはり全体的な問題に最後に戻り、私なりに感じとった総括的なことを言わなければならないと思いますので、当たっているかどうか別として、一言申しあげます。これだけの議論を長時間やったわけですから、やはり、何らかの共通の基盤、対等の土俵が設定できるということが大事なんではないかと思います。たしかに皆さんいろいろ意見の違いはありますが、若干意見のずれがあると言っても、この世が平和であり、そして問題が少ないような状況で展開して行くことを誰もが望んで集まってきておられます。三島先生は国際的な関係を根底において律するものは道徳でなくて法なんだとおっしゃって、それは現実に正しいと思いますが、同時にその法が例外的な付帯条項のもとでのみ守られている、つまり本質的には破れているという発言がありましたように、法だけではやはりダメなんではないか、そしてその法の根底にやはり倫理的な基礎というものが要るのではないかと、言うふうに思います。ちょっと例を挙げますと、皆さんもう誰でもご存知のブッシュ大統領がイラクに攻め込むべく、大量破壊兵器があるからと言って攻め込んで、実際には無かった、すると無かったらなかったで違う事を言い出した。つまり、言葉の本来の意味に責任を持つというよりも、自分がやりたい事のために言葉を適当にふりまわしているだけです。そんな言葉の使い方をその普通の人がして良いか、普通の人なら絶対に、二枚舌・うそつき、になります。ところが、現在では大量破壊兵

器の問題ひとつ取っても、そんなことが起っている。あるいは、私がこの間でも一番ビックリしたことのひとつに、我が小泉首相の非戦闘地域に関する国会答弁があります。質問に対して、自衛隊が行ってる所が非戦闘地域であると応えました。これ、おそらく、国語の試験なら中学生でも0点です。しかし、それがまかり通ってるんですね、我が日本の政治では。この変な話を通るのは知識・論理の問題ではない。おそらくそれをもっと深いところで支える根底的な倫理の問題だと私は思っています。としたらですね、そういうアメリカが「善」を唱えるのですが、それは実は「独善」なんだと幾人かの先生も指摘されましたし、多くの方も言葉はその通りでなくともそういう響きを持ってしゃべっておられるのだと思います。としたら、そういう独善に対してやはり本当の善とは何かということを我々が提起出来るというか、普通の人間がそれを考えるということ以外、どうしてその「変な話」に勝てるか。実際、ごく大雑把に言って、その普通の人間の発言権があるようになって来たのが、人間・人類の歴史だったと思います。そしたらですね、やはり共通価値というもの我々が確立する必要がある。ちょっと否定的な発言もありましたが、しかし朱先生も東アジア的な共通価値観というものでは提起されています。東亜でやれるのなら、もっと大きく世界的な規模での共通価値がなかったらおかしい。これはまあ後で議論することにして、東と西が相当違うことは確かですから、西の文明に対して東の側がはじめにどう対応したか、という事を考えてみます。清末に中国の留学生が日本に来ます。日本で色んなものを勉強した時に、一番おもしろいというか気になるのは、ヨーロッパ文明は素晴らしい、しかしどうもあれは、物の文明だ、制度の文明だ。精神や心はこっちだと言うんです。それが正しいかどうかということはさておいて、日記などでそういうふうに言ってる人はいくらかあるんです。後から回想してるのではありません。日本にいる時に新しい西洋文明を摂取しながら、これはどうも違う、十全ではない、そういうふうに言う人が多いのです。清末中国の場合、一般的にそうだったんじゃないか、と思います。日本のヨーロッパ留学生がそんなことを言ったとは寡聞にして聞いたことがありません。そして、そういう清末の留学生として、一番政治学的な素養をもち、実際に政治家になった宋教仁は、そういうことを明言している人です。もう少し後なら孫文という、これは誰でも知っている人、その人が『大学』、これは儒教の四つの古典の一つで、ユニバーシティじゃなくて大きな学問という「大学」なんですが、その『大学』に八項目〔格物、致知、誠意、正心、修身、齐家、治国、平天下〕というものがあって、それは世界最高の政治哲学であるということを繰り返し言います。おそらく一番言いたい所は、人間の心を修めるということが政治の根本にないとだめだということです。そういうことを言っておって、そういう所の強調は、実は歴史的な流れとしてあるんですが、そこまでなら西と東と、その「東の方にも良い点がある」という話して終わりですので、ひとつ、これは僕自身の発明ではなくて、ある文章から啓発を受けたことを最後に言いたいと思います。新儒家の一人に、杜維明^{トイメイ}という方がおられます。その人の文章に、「キリスト教と儒教の違いの根本的なひとつはここだ」と言っ

ているところがあります。それは、クーンというスイスの神学者の意見で、人間として一番大事なものはキリスト教の教えの、「己の欲するところを他人^{ひと}にもこれを施せ」だと言っている。それはそれで認められてよいことだと思います。しかし杜氏はそれに対して、「我が方はこうである」と言った。それは、孔子の『論語』に出てくる話ですが、「己の欲せざる所を他人に施すなかれ」です。この、「欲する所を他人にもやれ」というのと、「自分がいやな事はするな」というのとでは、同じように見えますが、根本的に違うと思うんです。どちらが、より根底的であるか。「欲せざる所を他人にしない」というものの方が根底的であると私は思います。自分が欲するところを他人^{ひと}にやるんなら、アメリカの善はこれは、「俺が欲するんだからひとにやる」ということが言えましょう。しかし、その「欲せざる所を他人にするな」と言うのなら、自分がして欲しくないことはしないのですから、これは言ってみたら、おそらく今イラクに攻め込んでいる人でも、攻め込まれる側の立場に立ったらそれはいやだなあと思うはずです。孔子様の方がキリストより偉い、と言っているわけではありませんが、このような違いについて相互に認識し、そこから現在の問題を考えていくということを、このたびアメリカニズムの問題を正面にかかげて熱心に討論をたたかわせた今日のシンポジウムの中から、将来への展望をきりひらくための、一つの共通課題として提起して良いのではないか、ということで話を終わりたいと思います。(力強い拍手)

司会：溝部氏 どうもありがとうございました。

2時に午後のセッションを始めた時には4時間近い時間が与えられておりましたので、無限に時間があると思いましたが、今になってみますと、もうあっと言う間に時間が過ぎてしまいました。もうあたかも人生の様だという風に思っております。それでは議論、まだまだ足りないと思いますけれども、ひとまずここで、2日間に渡りますシンポジウムが幕を閉じますので、2人の講演者の方と6人のコメンテーターの方々、それと翻訳・通訳にあたって下さいました方々に皆様の拍手を持ちまして終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。(大拍手)

(2日目 終わり)

Response of the Presenter to Commentators

M.C.: Professor Mizobe We are three minutes behind schedule so let me open the afternoon session for discussion at this point. For the afternoon session, I will be your moderator. My name is Mizobe Hideaki, and I am a professor in the Law Department of Kyoto Sangyo University. I also engage in research at the Institute for World Affairs. It is a great pleasure to be your moderator this afternoon.

Like this morning's session, Miss Yamada Eriko will be the main interpreter, but Professor Brunkhorst and Mr. Fini will each have an interpreter sitting next to them. We have until 5:45 p.m. for the free discussion. It is now 3:45 p.m.; first let us hear the responses of our keynote speakers, Professor Brunkhorst and Mr. Fini, to the speeches of our six commentators this morning. Let us first listen to Professor Brunkhorst.

Prof. Hauke Brunkhorst Thank you very much. I start with Bradley Edmister whom I first have to thank for his excellent paper. I agree with most of it. In particular in respect to the important and indispensable function of the nation state for the implementation and enforcement of national and international private and public law. The democratic and republican nation and state is no longer the one and only center of global politics and law, but still one of the most important global organizations. The state itself has become a global organization because today there is no square mile of land any longer that is not the territory of an independent state, even if it is a failed state. The moment a state decays is the moment when the international community starts to introduce state building programs. The price the state had to pay for its globalization was its integration into a system of different constitutional regimes of state and non-state actors which we now call the international community. As an integral part of a system of national, inter-, trans- and supra-national organizations the state has lost its sovereignty. State power today depends deeply on the (primarily legislative and judicial) power of organizations between, beyond and above the nation-state. These organizations regulate the global functional systems, and in particular the global economy.

Yet, I am not as optimistic as Bradley about the impacts of free markets. Economic freedom was one of the great advances of modernity, but *economic freedom* never ever leads automatically or necessarily to *democratic freedom*. Democratic freedom needs not only a *regulation* (and there is nothing like de-regulation because every de-regulation needs immediately re-regulation) of the economy but its *constitutionalization* in a way that ensures equal chances and a certain amount of welfare for everybody. The basic problem with the global economy is that neither the states nor the other existing global organizations and emerging constitutional regimes any longer have the power of the now decaying democratic social welfare state to keep the economy, which has become global *turbo-capitalism*, under strong constitutional control. Different from the old days of state-embedded *late-capitalism* with its state-embedded markets we now have a global *turbo-capitalism* with market embedded states, and an economy of market embedded states is a regulated but deconstitutionalized economy. Deconstitutionalization has winners and losers. The winners are the upper middle classes (and higher), the losers are a growing number of people who are excluded from access to all basic social systems. They are excluded from work, consumerism,

citizenship, schools, law, political participation and so on. Up to now the losers of the deconstitutionalized global economy are the under-classes and more and more the lower middle classes, and those who live in the periphery, in the *Banlieu* of the globe. For them the proponents of neo-liberalism can only offer the empty *promise* of a glorious future for everybody. Whereas economic freedom cannot offer more than an empty promise to the losers of the private use of *economic freedom*, *democratic freedom* gives political means into the hand of the losers of economic progress to change their social situation. To be sure, we need both, democratic and economic freedom, but economic freedom alone is far away from presupposing democracy. Economic freedom fits as well to democracy as it fitted to Hitlers Third Reich, to Pinochets Chile, or to the communist party's regime in China.

Bradley's is focusing on a private law, and I agree with most what he said in this respect. But Bradley sometime misses my very point. I guess we have to draw a further sharp distinction between international *private law* and international *public law*. International private law—Bradley said, and I agree—is concerned primarily with courts and contracts. In private law, no parliament makes binding decisions, in private law individual persons, firms or other legal actors agree voluntarily in some reciprocally binding rules. They are the original creators of all private law. It's nothing wrong with that, as long as both contradicting parties have equal chances to say no. The necessary condition of equal freedom in private law is that both partners have a real alternative if they say no. Just this condition is, for example, never ever automatically fulfilled on labor markets, and only civil courts and dispute settlement bodies are not enough to secure the necessary conditions for an equal use of private autonomy. Courts can control but not create and implement it because they are not a legislator. Therefore the basic situation in global markets and private law regimes regularly means unequal freedom of private actors. Particularly in so called 'Third World' or in 'threshold countries' poor people are often without sufficient support by strong unions, without sufficient judicial remedies to defend themselves, without sufficient social security etc. Here the people who need labor to survive, have no chance to say "no"—but their employee employer usually can say "no" because there are simply enough people looking for a job. In all these cases equal freedom of markets is fiction. This fictive character of private freedom only can be overcome through public legislation, and public legislation only works if there are sufficient (administrative) means to implement *all* public legislation.

The very problem with the effective globalization of markets, economic freedom and private law regimes is that there are not enough constitutional means to control the development of markets and to implement the basic conditions of equal use of economic freedom within global private law regimes. In a world of market embedded states the constitutional regimes of the states *together* with the new post-national constitutional regimes like the EU-, the WTO- or the UN-/SC-system are able to control major threats to peace all over the world, to control and implement human rights regimes with growing impacts on despotic regimes or failed states areas, to prevent major human rights violations and genocides. Global constitutional regimes which are public are already strong enough to implement the famous Durkheimian pre-contractual conditions of contracts, and to re-regulate the global economy. Global constitutionalism today even is strong enough to keep the strongest super-powers like that of the United States a super-power within international rule of law. In particular you can observe this in the case of Guantanamo, where the US-supreme court now has decided that the US have to keep the Geneva Conven-

tion even in Guantamano and in other all cases of terrorism everywhere in the world. The main advance of global constitutionalism is that there is no longer *imperialism* which (like a classical sovereign king or state) stands at the border or *beyond* the rule of law. Today there exists only *hegemony*, and hegemony different from imperialism has to operate always within the rule of law. This does not mean that there are no longer *illegal* acts which are not sanctioned, especially if they are performed by the strongest powers, but it means that there are no longer *extra-legal* acts of the sovereign power of a given legal community. But (different from the old days of state-embedded and sufficiently constitutionalized late capitalism) the existing global constitutional regimes are not strong enough to enforce democratic equality against the hegemony of particular ruling powers and particular ruling classes, and the existing global constitutional regimes are not strong enough to control and implement the basic conditions for the *equal use of private and public autonomy*. One of the main causes of the weakness of international and transnational and even of supranational law is that the process of international constitutionalization at was also a process of de-formalizing international law. International law today, private and public, is in a great area of fields *soft law* emerging from *informal* appointments, meetings and consultations. Informal power (for example that of the Basel Bank Commission or the European Council or the G8) cannot be changed by legislation and cannot be controlled effectively by courts, and therefore informally created soft law has a *strong impact* not only on international but also and in particular on national legislation and jurisdiction, and through de-formalized soft law democratic procedures often are bypassed and marginalized by executive and hegemonic powers. To sum it up: What is so perverse with the present global economy and politics is *first* that the price of the progressive explosion of all productive forces of economic communication is the destruction of the basic conditions of *equal* freedom for everybody that is prescribed by all national and even by all inter-, trans and supranational constitutions. What *secondly* is perverse with the present global order is that without hegemony (in particular of the United States) there can be reached no legal peace, and no effective prevention of major human rights violations, but at the same time just this human rights and peace keeping hegemony undermines the conditions of possibility of democratic self rule all over the globe. The effect of both faults of international public law and global constitutionalism is the emergence of a new transnational ruling class, whose ruler-ship Craig Calhoun nicely has called the *cosmopolitism of the few*.

Now, very briefly, let me make two remarks on the paper of Professor Mishima. I agree in particular with what he said about the role of the past, and (as I already said) I think he is completely right to emphasize that there will be no stable peace and no future for a greater East Asian democratic community if the distinction between those who were the victims and those who were the perpetrators during the Second World War is repressed and kept unspoken, and in particular if the guilt is not acknowledged by the country or countries where the perpetrators came from. But professor Mishima also posed the important (and old Kantian) question if in the end any cosmopolitan order which can be reached beyond the nation state is a non-democratic order. Even further (with Marx) he faces us with the question, how we can cope with the facticity of power and hegemony, and with the dominance of the hegemonic power within the rule of law. Isn't it illusionary to believe here in the force of law? One must take this question very serious, because even if any law is better than no law, law is not always, as

Gustav Radbruch once said, in favor of the ruled classes but as well, as Phillip Allot (and Marx) says, in favor of the ruling classes. This is true. Law has, as Habermas states at the beginning of his book on legal philosophy, a Janus face. It is, as Martti Koskeniemi would say, two opposing characters in one person, Mr. Jekyll and Mr. Hyde. But during the fight of social classes and groups about law there are chances for the ruled classes and marginalized groups to change the law, to formalize it, to bind the ruling classes through formal rules which are equal for everybody. The hegemonic powers of today must not keep this power, and the structure of hegemony *can* be changed (but must not) in the direction of more egalitarianism and more democratic freedom. Radical reformism (and sometimes even a revolution) is not a priori without chances.

Now, my time is over, and I must apologize that I cannot answer the other commentators with whom I mostly agree. But I guess, some of the most important points I have mentioned already in my far too long talk.

M.C.: Professor Mizobe Now, let us listen to the response of Mr. Fini. (Applause)

Mr. Massimo Fini I will mainly respond to Professor Mishima's and Mr. Bradley Edmister's arguments, not because the others are less interesting- they are just as engaging because of the unique perspectives they have brought to the elucidation of today's topic, but because these two commentators have raised the most strident criticism of my position. Professor Mishima accuses me of being a pessimist, a conservative and a nostalgic, but I beg to disagree.

There is absolutely nothing that I would like to keep in the present model for development. But I am not turning back to the past; I look into the future. I use the past to demystify the present, its deception, and its illusions, which are more or less true and lay bare its untruthfulness. In my opinion, the conservatives are those left-wingers or right-wingers, liberals and Marxists who insist on sticking to the present model for development at all costs even though in different ways. They think that they are the pinnacles of modernity, are self-confident, and actually think that since they have been born into and raised in modernity, their success has made them the top of modernity. Unfortunately, in the last two and a half centuries since it started in the 18th century in the industrial revolution in England, modernity has aged quite a lot. Modernity's ethos is gone; it is no longer modern. It has aged more because in the past two centuries, history has reached a speed unknown before to mankind. For this reason, left-wing and right-wing stances, liberalism and Marxism in their various forms cannot respond anymore to the profound needs of contemporary man.

Two centuries and a half ago, we got on a train that seemed to be extraordinary, with a shining locomotive that should have brought us happiness. This hasn't happened. The questions before us today are not how to better place passengers on this train anymore; they have changed. Firstly, "Where is the train going?" Secondly, "Do the pilots of this shining locomotive, or those who flatter themselves in driving it, still have control over it?" "Has the train run out of control?" "Are we still able to choose the direction, the speed and a different destination for this train?" Or, instead, do the rails chosen two and a half centuries ago force us inevitably to go in a direction we cannot change, at a speed we cannot control, run continuously at an increasing speed towards the inevitable catas-

trophe?" Let me explain why a catastrophe is an inevitable consequence of a system that is based on exponential growth (as I pointed out in my presentation, exponential growth exists only in mathematics, and not in the natural world); if we reach the point of exponential growth, then, there will be catastrophe. The fundamental question then becomes, "Two and a half centuries ago, did we get on the right train?" This is the central point of my inquiry.

The second counter-argument of Professor Mishima says that not all of the humanitarian interventions had a hidden political and economic agenda, but most of them were carried out with the best intentions. This is absolutely true. Precisely, it comes to prove my point, which is that we in the West are convinced, truly convinced, that we represent the Good; we are convinced our values are universal, that they are shared by all peoples, cultures, and societies, even if their lived histories and traditions are completely different from ours. What is scary is not malice, but rather good faith. You can always unmask bad faith. On the other hand, good faith is unfading and self-confident, and for this reason, it goes on calmly existing against the test of time. Unfortunately, the past teaches us that not only the roads to hell but also the paths of human vicissitudes are paved with good intentions.

On the third point of Professor Mishima's arguments, there may be a misunderstanding. He points out that I blame Judaeo-Christian thought, and especially Christian thought, for being totalitarian thought. It is not exactly what I mean. I argue that in Christianity, in the notion of evangelization, there is not only a need to spread the gospel, which is legitimate, but there is also the pretence of converting everyone to it. Here lies the core of the totalitarianism in the West at an initial stage. This is the "obscure vice", for which I have named my book — which has been really successful in Italy — for its characterization of the whole of Western history. The reduction of everything into one single reality is what is implied in the book. It is clear that today's western totalitarianism is not a religious one, especially in Europe, because nothing, or very little, of religion, and even less of Christianity, is left in Europe. It is a secular totalitarianism, that wants to persuade everybody, with good or bad manners, almost always with bad ones, of the validity of its values, its culture, its own "way of life" and, above all, its economic system, that cannot perceive what is different from itself.

With the same explanation, I would like to address Mr. Edminster's argument that says that it is not true that globalization has come to an end, and that only 72 countries in the world thus far, have a free market. This is true, but it is also true that we are trying in every way possible to standardize the other 120 countries to the West. I would say that an emblematic example is Afghanistan. Afghanistan, governed by Mullah Omar, received, I'm sorry to say, an endorsement by the majority of the population, who not only did not want to Americanize itself, but absolutely, did not want to modernize itself. And it has been wiped out using bombs and depleted uranium, under the pretext of looking for and finding a man, Bin Laden, who in the end has not been found. In Mullah Omar's and the Taliban's stead, who used to represent a significant part of their country, a consultant of UNOCAL (a petroleum company which has its headquarters in California—translator's note) has been placed, who is a person faithful to the Americans, as Karzai is. We, as westerners, have deprived the Afghans of their history by imposing our own history on them.

Finally, let me say that I am glad to be in agreement on some issues, on many issues, with Professor Zhu. I

believe this convergence of opinions among intellectuals belonging to very different cultures as the Chinese and Italians are, or the Europeans in general (in this case Italian, as I am Italian), must be matter of reflection for those who support or advocate the present model of development and are pulling us — against our and their will — to the tragedy, while swinging the sword, in the conviction that they represent “Good”.

Thank you very much.

Panel Discussion

M.C.: Professor Mizobe I am sure that the six commentators would like to respond to the speeches of the keynote speakers just now. However, we would like to call on Mr. Edmister for his comments on the ideas of the speakers.

Mr. Edmister In reflecting on the two speeches that we heard and responding in broad brush strokes, I think that professor Brunkhorst and I are speaking within the same general framework and share a great many ideas, and that we are looking for answers regarding the right way to create an international society. Whereas Mr. Fini’s vision of the appropriate world order is more like an alternative, and we are less engaging each other directly as we are setting side-by-side two alternative pictures.

In response to Mr. Fini, well, what I sensed from Mr. Fini is that he looks at globalization and internationalization of society, and he sees some sort of cultural authenticity which is being lost in standardization—that the influence of America as well as other countries on Italy is a broad standardization of Europe. He has presented an alternative where European society—Italian society—deals with this destruction of Italian cultural authenticity by closing Europe, by becoming inward focused and resisting globalization. My main fear, or question, is that, as he pointed out, the Italian people themselves have international, external aspirations. They have adapted European and American ways into their lifestyle. They want “americanata”. They want progress. They want modernity at some level. I wonder how you suppress the external ambitions, the external and international aspirations—the cosmopolitan aspirations—of the Italian people in creating a closed society that rejects globalization, unless it is through some new form of government. And it couldn’t possibly be a government that supports freedom, free expression and democracy, because any such form of government will necessarily be faced with the problem of how to suppress or contain these external aspirations. My fear is that democracy and freedom could be destroyed by adapting this model of a closed Europe supported by Mr. Fini.

I was very impressed with professor Brunkhorst’s comments in relation to my speech. I sensed that we both share common values of democracy and modernism as a source of progress. We don’t have the same pessimistic outlook as Mr. Fini. Where we seem to differ is in the appropriate structures to be used in creating an international society. Mr. Brunkhorst supports the expansion of international formal law. I think professor Brunkhorst is absolutely correct that “soft law”, the sorts of informal international bodies that have grown up over the years in public international law, are to some degree anti-democratic. I think it’s true that formal law restrains people because it is absolute. The United States certainly does prefer multilateral forums that are flexible and “soft”, because, in

a changing world, it finds that flexibility is useful. And formal law is absolutely restraining. We see that in the security council where there are formal restraints. I wonder, though, whether within Europe, formal law to some degree has been successful because the societies are democratic. They share common values. They share economic prosperity and share a common sense of social welfare in the state and the way it should work. They have been able to create formal laws that are widely assented to. To some degree, then, when we create formal laws, the question is then who creates them? Who should implement those structures? Who should create the formal law? And can a formal legal structure be democratic? I think that's important. I wonder if some of the recent opposition of Europeans to the European Union constitution has been that there may be a frustration with technocrats, the bureaucracy, and a sense that the formal law of the EU has not been appropriately democratic or responsive.

So my skepticism, which I expressed in my own paper, is that if we try to impose formal law too early in the transnational sphere, it will have to be introduced as a practical matter through the same kinds of detached institutions that are currently engaged in the "soft law" dialogue. I wonder if those institutions can be fully democratic and really create a formal law that is empowered by some sort of relation to democratic principles. And that's why I suggest that private law has been successful in its more contractual, *ad hoc* use of national legal structures and national legal systems to develop a very creative free market of ideas. I suggested that activity in the transnational sphere is already appropriately addressed by the necessary entanglement of transnational structures and functional global systems with national legal structures, and that people do retain power over the transnational sphere even without creating international formal law.

M.C.: Professor Mizobe Thank you very much. I think that our six commentators have counter-arguments to express, let us call on them one by one. At this point, we will give the floor to Professor Zhu Jianrong.

Professor Zhu Jianrong Yes, I would like to give my comments on the relationship between the EU and East Asia. In considering the future of East Asia, the relevant question is, to what extent should we learn from the EU? The answer to this question is clear; East Asia has a lot to learn not only from the EU but also from America and other parts of the world. I am not suggesting that we should imitate the EU and others, but that we should find some viable feature that is rooted in East Asian culture and based on that, build a sustainable future for East Asia. I think that the backbone of the European community, besides its economic and other forms of intercourse, is their shared religious cultural tradition. In addition, comparatively speaking, the closeness of the economic and social development of the EU member countries has facilitated their integration. If East Asia is viewed in terms of religion, and stage of development, it is a region that is defined by pluralism.

This region has all the religions of the world and the countries vary from Japan, which belongs to the developed world, to countries that are lagging behind in development. I think that discovering in haste a common characteristic and equality to serve as a binding element in the integration of East Asian countries is not possible. There is, however, a need to define this East Asian special cultural trait that should be developed as East Asia

attempts to go through the process of regional integration. But first, there is a need to address issues of regional economic development, the guarantee of basic human rights to all citizens, the need to raise the standard of education, and cooperation to solve economic problems across borders.

It is beyond question that countries in East Asia, including China, must seek democratization; now with China's economic reform, and its route to liberalization being extended, then perhaps, after 15 or 20 years, democratization will come to China as a nation. At present in China, the population of the middle class is estimated to be between four hundred million to five hundred million. When the time comes that the number of people who are considered middle class will exceed half of the Chinese population, then it is clear from the examples of Korea, Taiwan and Southeast Asia that middle class dominance will bring about democratization. What I am emphasizing is the danger of the rush to democratization; it is a fact that democratization does not solve all problems and it is not good for fundamental problems to remain unsolved. The majority of the Chinese desire a country similar to America, Japan and Europe, but they don't want to become like Russia and India. In national politics, Russia is practicing democracy. However, within the system, a mechanism to completely stamp out the vestiges of dictatorship is still not in place. In addition, the extent to which the mafia has obstructed the institutionalization of a market economy in Russia is something to worry about. It is said that India is the world's largest democracy, but the caste system wherein Indians born into it are treated unequal has not been abolished. I am not advocating keeping the current state of affairs in China, but that to reach democratization, it is necessary to follow a process and a sequential path. The economic development of a country, the improvement of the people's standard of living and the improvement of education are like the foundation of a house that must be set first. And then, the roof, which is democracy, and which will support the pillars of the house, must be built. Subsequently, the mechanism for constitutional government, market economy, competition, the guarantee of the rule of law and an equal distribution of wealth will then be established. Currently, China is still halfway through the process and most of these democratic imperatives are still nonexistent. I think that to build a true democracy in Russia, India, and China, and in many countries in Latin America, a solid ground and strong foundation must be completed at the outset. In this regard, Asia will first strengthen the foundational elements from now on to reach the ideal state of democratization. Asia has another merit that can work to its advantage. In comparison with Europe, there is magnanimity towards other cultures and religions; there is a mutual co-existence of different cultural and religious traditions. Perhaps, it can even be said that there is more tolerance in the region than there is in America and Europe. In facing the future, East Asian countries do not aim for standardization, but based on their emphasis on economic development, their varying attempts to guarantee limited human rights and their respect for each other's culture, they can forge a common identity. In this process, using European equality, American dynamism and Asian magnanimity as foundation, the future of the East Asian community can be sought.

M.C.: Professor Mizobe Thank you very much. May we now please listen to Professor Mishima.

Professor Mishima Kenichi First, what I would like to bring up is the fact that democracy and the free market

economy, or capitalism, have always had a tense and complementary relationship. They are not the same thing. There is also a conflict between these two concepts and also a point of cooperative fusion. This is easily understood if we look at pre-war Japan and present-day China. In both cases, capitalism has prospered or is prospering, but we cannot call them a democracy. We cannot say that Mitsui, Sumitomo, Mitsubishi desired democracy then.

In the same regard, one case we should mention was Europe's aspiration to be a democratic nation like America. This was especially true in the 18th and 19th centuries. The common image portraying those who immigrated to the New World as those financially ruined and hungry is only a half-truth. Immigrants to America harbored dreams of democracy. Of course, there were many who went to America to stave off hunger, but the important thing is that there were immigrants of exceptional intelligence and ability who made the choice to leave Europe and head for America in the hope of establishing a new democracy. Goethe had glorified America. America was a wonderful country. It had no old castles and ruins whatsoever. "I would like to live in such a country myself", he said. Even gloomy Kafka was an avid reader of "The Leaves of Grass", a collection of poems by Walt Whitman. In this vein, it was thought that America was a great country, in other words, democracy (freedom and equality of rights) and prosperity were connected. Furthermore, after the war, it was perceived that the reason why Europe had done so well was because of the introduction of American democracy into Germany. Europe learned from America. Japan also has learned from America. We owe a lot to America.

However, the actual America has changed after that, and we can no longer say that capitalism and democracy have coexisted well. Domestically, there is an extreme gap in wealth among Americans and even if we look at the elections, we cannot deem the outcome as a result of freedom of speech. The most extreme example is the American foreign policy and its trade policy. They are rather arbitrary and many people in other countries, especially those in the Third World and with the inclusion of Japan, have felt the problem. A good historical example would be the automobile exports of Japan. When Japan embraced trade protectionism in the automobile industry in 50s and 60s, America pressed for trade liberalization. When Toyota, Nissan and others had become strong in the world market, America felt the danger and started to put pressure on the Japanese automobile companies to restrict their exports. Having been defeated by the political maneuverings of America, the Japanese automobile industry started practicing "self-control", in other words, self-regulation. The impression that America does everything according to its convenience, and often does things outside the context of the perception of the American culture of dynamism and legal formalism is not easily eliminated. It is not surprising to note that many countries have the sense that they have been done in by America. In the international arena, America has not demonstrated cosmopolitanism and democracy, even though it understands that to solve trade disputes, to a certain extent a compromise is necessary and must include the consideration of interests of the parties concerned. The same can be said of other international problems; especially since the days of the Vietnam War, no matter what view we take of America's position on international issues, the absence of the expression of cosmopolitanism and democracy in its policy stance is quite apparent. As a result, the perception that America puts importance only on its own interests and practices a double standard, a triple-standard and even a multi-standard has emerged in many areas of the world.

Kant's international constitutionalism is the exact opposite. According to Kant in regards to your own personal affairs, if you allow yourself to be the judge, it is rather ugly. The awareness that to be the judge in one's own issues is not possible is lacking in American politics, especially in American diplomacy. In trade disputes or in war, America does not intend to subject itself to international mechanisms where it is not its own judge. Everyone judges themselves according to their own convenience, and to avoid this undesirable fact from dominating the international system, there is a need for a framework of legal procedures which involve a lot of complications, but nevertheless, this is the project of today's society. Regarding legal formalism, Mr. Edminster a while ago expressed some sense of doubt about it, but this is all we have. If we do not resort to legal formalism in the practice of international affairs, then, the dominant power, the hegemonic country, will lead as it likes and when it leads the world arbitrarily, problems erupt everywhere, which become unmanageable, even for the hegemonic power, which is exactly the situation now.

I would like to offer an example in Japan that may not be a consideration of legal formalism from an international standpoint, but may nevertheless put the issue in perspective. It is quite a regular practice in Japanese universities that when a professor selects his own assistant professor, he appoints someone he personally thinks is suited for the job. This is the exact opposite of legal formalism. Of course there is a selection committee, but it is only a formality that they go about the selection process; in most cases, the committee gives a stamp of approval for the recommended candidate by the professor concerned. In contrast, in Germany the selection of a candidate to fill a professorial vacancy necessitates the presence of a student representative in the selection committee, and in some cases, professors from other universities are also invited to give their opinion. The system in which people who come from a completely different perspective and are disinterested in the outcome of the selection come to watch the process is well established in Germany. This way, a suitable and excellent candidate ends up being selected.

Strictly speaking, I am not sure if the figure of speech above is appropriate, as the source of the problem is different, but in any case, the same thing should be done by the international organizations. Therefore, the fact that America does not subject itself to the international court of justice has engendered many problems. Of course America probably conducts various activities upholding the special interests of its capitalists that are always considered compatible with its good intentions. However, it is precisely in this context that mistakes are easily committed when America uses only its own standards to judge its actions. I think they must obey international law or formal law without any condition.

What I have been trying to explain is that there is no direct or simplistic relationship between capitalism and democracy. The long cherished hope of Europe for American democracy has turned into an excessive form of a perverted phenomenon in its hegemonic foreign policy in which selfish-interests have prevailed. Even for me, this is a difficult problem to solve. However, Kant's international constitutionalism could offer a way out of this situation. This is all I have to say on the matter, as there is not much time left.

M.C.: Professor Mizobe Thank you very much. Professor Song Seok-Won, please.

Professor Song Seok-Won Thank you very much. I would like to talk a little bit about North Korea as nothing much has been said about it in the previous speeches. When I regard Americanism and Anti-Americanism on the Korean peninsula, I can't help but view the South Korean position as the most bizarre. South Korea and North Korea share the same race, but they are divided and as everyone knows North Korea embraces the strongest form of anti-Americanism in East Asia. Realistically speaking, no other country in East Asia considers it a positive development to have a disagreeable relationship vis-a-vis the superpower of today, America, except North Korea. With such a relationship existing between North Korea and America, the issue of its suspected nuclear development program is not only a problem which concerns South Korea, but also, it is profoundly related to the security of America and Japan. How South Korea views the North Korean problem is thoroughly related to Anti-Americanism in the country. There are contrasting standpoints represented by the different demonstrations that gather in front of the square of Seoul City Hall and next to the Parliament building on Yoido Boulevard. In 2002, the same year that the World Cup was held in South Korea and Japan, two junior high school girls were run over by an American armored vehicle and died. Those two girls who did nothing wrong were killed by the American soldiers. They were around 15 and 16 years of age. It was truly pitiful, and the father of the girls did not know what else to do to express his grief. He carried his 3 year old and 4 year old daughters on his shoulders and demonstrated in front of the city hall. The mother, on the other hand went to Yoido Square with her son in her arms. She held a candle in her hand. With candles in their hands, people then opened an anti-American rally. That scene was tremendously touching and symbolized anti-Americanism in South Korea. On the other hand, people with a different agenda organized another form of demonstration at the same square. These people were demonstrating against the policy of the present government of Kim Dae Jung, a continuation of the sunshine policy of the previous government towards North Korea. Even though there are a lot of people in South Korea who are in dire economic straits, the government has decided to use too much of the people's taxes to help North Korea just because we belong to the same race. In addition, there were those former Korean Marines who are wont to be extremely rightist. In the same place, they opened demonstrations that were from an anti-Government movement, holding South Korean flags and the American Stars and Stripes. In front of the city hall, various demonstrations that reflected both support for and opposition to America presented a contrasting standpoint of Americanism and Anti-Americanism in South Korea. This is the situation in South Korea now. Today, between the ruling party, Uri, and the opposition party, Hannara, there is a range of degrees of support and antagonism towards America. North Korea is aware of this fact and maneuvers its policies accordingly. Certainly, America is an ally of South Korea. As an ally, America must be careful in how it deals with crimes committed by its troops stationed on our soil. When crimes happen as in the case of the two junior high school girls who were killed, the victims must be given justice. However, in the said case, America had jurisdiction over it. When the trial of those accused in the incident yielded a no-guilty verdict in a court in America, justice was clearly not served. No one could be held responsible for the deaths of those two innocent young girls. I think that no matter how kind the people of South Korea are, they simply cannot accept this outcome. That became a rallying point against America in South Korea. It impacts the posture of South Korea against North Korea in that a close relationship with America cultivates repulsive atti-

tudes against the North and vice versa. In this regard, how should South Korea think about the future in relation to North Korea and America from now on? Some South Koreans might be debating the choice of putting distance from America as a matter of destiny, but this is not what the majority of Koreans wish; they agree that this is not the path we should choose. The reason why South Korean people do not wish to alienate America was previously mentioned in the response of Professor Brunkhorst. To maintain the present world order, the existence of America, the sense of its existence in the world, is terribly crucial. I think that the presence of America is important for the balance of power in East Asia, for its security guarantee, and even in the issue of maintaining peace in the region. Within the region, America perceives North Korea as a source of threats and this is not an easy problem for South Korea because North Korea has its own agenda, which is beyond the influence of the international community. Furthermore, as mentioned by Professor Zhu Jian Rong earlier, compared to the past, China is incorporating some democratic processes within its system, and it is heading toward becoming a democratic country. For South Korea, this is a welcome development. We wish China to become a democratic country. Thank you very much.

M.C.: Professor Mizobe Thank you very much. Dr. De Prado, please.

Dr. De Prado Thank you very much. Well, both Professor Brunkhorst and Mr. Fini have not responded to my speech. However, I have learned a lot from the response of Professor Brunkhorst and I would like to hear him talk more about those ideas.

Especially I would like to talk about the East Asian community because you seem to be interested in the paper and you perhaps would like to know about the complementary processes of regional cooperation and integration in the region, and then connect them better with Europe and the rest of the world. I think I will continue in English and, perhaps with a bit of help from the translators, then move into Japanese.

The East Asian Community concept basically comes from the Japanese government, from the Koizumi cabinet. It was presented in 2003, only three years ago, building on a number of multi-level initiatives, some taking place in East Asia, and others more globally.

Multi-level initiatives in East Asia have a history of about 40 years. The ASEAN process started in 1967 as an anti-communist alliance supported indirectly by the United States and others. For over two decades it was just a loose alliance, but after the Cold War it enlarged to ten countries and advanced functional issues, first economic, and later also social. The ten countries actually aim now at an ASEAN community of three spaces (politics, economics and social issues) similar to the European Union pillar structure. That is much more than the trade, financial and other economic aspects often publicly discussed in East Asia.

The East Asian community, whose main component is ASEAN, is also very broad-based in its objectives. I said in my presentation this morning that some legal political institutional means are advancing and that in 2007 ASEAN will host its 40th anniversary summit in Singapore, where the ASEAN Charter, somewhat resembling from a distance the European Constitution, will become the base of future cooperation in ASEAN. That is the

main institutional or track one process.

ASEAN countries have also to link with other countries in the region and more globally. They have serious dialogue partners. The European Union is one of the key ones, but the United States, Russia, India, Australia and New Zealand are others. But the main ones have become Japan, China and South Korea. These three countries are trying to create another regional grouping in northeast Asia. Actually, on the margins of the ASEAN meeting held in Bali (Indonesia) in October 2003, they signed the first tripartite cooperation agreement at the summit level. The agreement is more or less advancing at the ministerial and senior officials levels in a number of interesting, dynamic, flexible, forward-looking functional issues. It has been advancing except for the last December summit, mainly because of the problems of addressing joint Chinese-Japanese historical memories, but I don't think it is really precluding the Northeast Asian countries from generally advancing. There is a bit of a proxy war between China and Japan to see who leads Northeast Asia, and East Asia in general, but I think both countries—both powers—realise that they have to find a compromise and work on. So the East Asian community is based on the original ASEAN institutional progress now linking to northeast Asia.

But one has to realise that there is not so much a democratic or communicative space like in the European Union with so many institutions and committees; and the soft power created by some business committees are very important in the European Union. So if we come to East Asia and realise that so much is happening at the track one level but so little civil society movement, one wonders who is driving the regional process? That's something we should really study a bit more. I have looked into it a little bit and realised that so-called 'track two processes', which here are basically track 1.5 processes in which elite academics, think-tank experts, business experts with research capabilities and government officials usually in research organisations have for many years been coming together on the margins of track 1 processes, sometimes sponsored by the US, sometime to talk to European partners, sometimes around multilateral organisations (United Nations, World Bank, etc) and now on their own. There are now actually several track 1.5 processes very clearly named: "East Asian Vision Group", "East Asian Study Group", "East Asia Congress", "East Asia Forum". The participants often write very clear set of guidelines which are being taken very seriously by the Track 1 political leaders.

This I think one should compare with what is happening in Europe and the rest of the world. Other regional processes which don't have a set of very democratic or political institutional arrangements might be looking to the East Asian model as the European ones is too complex and with a long culture. The East Asian model is beginning to exert some soft power which is becoming quite interesting. In any case, I don't think the East Asian track 1.5 processes are incompatible with the US system in a number of ways. Actually religion is not that important in the East Asian regional processes, which is I would say 'human-driven' and based on functional cooperation in which internal groups of leading countries, ASEAN or northeast Asians, can collaborate flexibly with external partners for issues of common interests in economics, for instance trade agreements, information communication technologies, energy, even agriculture or other issues. These mechanisms tend to be at first quite inter-governmental but that allow for a flexible response. They have not created very strong institutions that could be paralysing, so actually the East Asian model I think may be becoming a very interesting, distinct model, com-

parable and compatible for a number of functional issues, and even better, for other parts of the world.

Finally, I would urge Europe and East Asia to jointly study these developments. Because I realise than here today and in many other talks I attend the European model is often being mentioned for comparison purposes by East Asians but without really knowing what is happening, and that Europe is starting to compare with other parts of the world and, similarly, without knowing in detail what is really happening in East Asia or beyond. As the European and East Asian models are two partially distinct models to the US globalising projection I think much of the world would be very interested in studying them.

Thank you very much.

M.C.: Professor Mizobe Thank you very much. We still have time, so I would like to call on Mr. Hazu Hiroaki now to give us his thoughts.

Mr. Hazu Hiroaki Within the next five minutes, I am going to present two main points, but with the time constraint, it may not be possible to get to the second point. (Laughter)

Mr. Fini's way of viewing the problem has defined it in rather radical terms. He has pointed out that the last 250 years since the industrial revolution has been like getting on the wrong train. Beyond question, this way of articulating the present issue is rather rare on both sides of the Pacific and Atlantic oceans. However, I think that the number of people who will think the same way about the problem at hand will increase. A straightforward example would be the rejection by the French people of the EU constitution. It is thought that the reason why the French rejected the EU constitution during the general referendum is because they think that rather than controlling competition, the EU constitution will promote it and strengthen it to the point of excess. In reading the EU constitution itself, one discovers various strands of interpretations, and it is possible to accommodate various standpoints depending on what interpretation is convenient. The keyword of the constitution is to create a social market economy with competitiveness and this is mentioned from the very beginning of this document.

The constitution can be interpreted to mean, from the standpoint of those who place importance on competition, that this could be a version of European globalization and a ticket to promote it. Another possible interpretation is its guarantee to defend the old European society, if one pays attention to the reference to the social market economy. Finally though, the French people have chosen the former interpretation which suggests that with the EU constitution, competition will be excessively promoted. If this is the case, then the French think that this is not a desirable situation. In the speech of Mr. Fini, he offers a perspective covering quite a long period spanning 250 years; but I think that the train during the last 250 years has not traveled at the same speed. Since the great depression in 1929, world capitalism has not experienced at least the same scale of panic again. Why have the periodic great depressions disappeared since 1929? Of course, the answer lies in the occurrence of the Second World War. In the ten or twenty years that followed the war, there was an abnormal situation, but even after the war, no great worldwide panic occurred again. Capitalism has been rescued by mass consumption society. Up till then, capitalism was driven by the production of goods to satisfy people's needs. Later on, the capital-

ism that emerged was one propelled by the cultivation of desire for things; for example, people buy cars not because they need a new car but because they like the new model; and it is the same with the buying of clothes, people buy the most recent design to be in fashion. The motivation for consumption is the desire to possess something not out of necessity, but because of the created desire to acquire goods. This tendency to buy things out of caprice rather than out of necessity has always been present in the capitalist world, but this came into full bloom after the war. The transformation of capitalism from a type that is driven by the production of goods to satisfy needs to one which is a result of the creation of a desire for goods is a self-perpetuation of the system. In a certain sense, this is an extreme turbo capitalism. This has engendered environmental problems and also the problem of working too much. There are probably many people who prefer the bucolic capitalism that came before its turbo version; there are even those who want the present high-speed capitalism to slow down and those who want to stop it altogether. I think that there are many different perspectives of viewing the problem, but what is certain is that the number of people who cannot stand the current speed will increase. In this regard, Americanism is sort of what I referred to in my commentary earlier when I talked about the unique American Christian Fundamentalism. While there are many definitions of today's globalization, one that I have included in my comments is that it is synonymous with Americanism; it carries the connotation of a religious desire, and does not allow criticism, like an ideology or a religion. I feel that globalization has become this sort of an idea. In this light, I have cast doubt on the basis of its existence; to draw conclusion from this exposition, it is necessary to keep asking questions. There is only one minute and thirty seconds left to discuss the last point that I would like to bring up here. I would like to present the second point as comprehensively as possible. This pertains to Japan, and as a Japanese journalist who is privy to things as an insider, I thought I should include the reality of Japan in the topic being discussed here. I would like to refer to the Japanese problem. As Mr. Fini said, the religious desire is of course shared by Japan as well, and one Japanese characteristic that is rather extreme is the runaway religion of development. A common example would be what I mentioned earlier about cars and fashion. In the case of Japan, the practice of shopping when a new model comes out is not limited to cars and fashion; it is also true with buildings, including residential buildings. Buildings and towns in this country, much like fashions, are rebuilt and renewed. This chronic problem started to happen after the war. For example, the average life of a residence in Japan is only 26 years. In America, it is 100 years, in England, 140 years. Within Japan, there is criticism against Americanism, criticism against globalization, but America constructs buildings that last over 100 years. I would like to bring up an argument that Japan has no right to criticize consumer-oriented American civilization when after 26 years they destroy their buildings. In addition, the city of Kyoto, which has been destroyed as everyone knows, is called the historical center of ancient times, but the appearance of old Kyoto has disappeared. That is the point. For example, Kiyomizu temple is beautiful, Kinkaku temple is beautiful but the buildings in between them have a life span of 26 years and are all made of chemical materials. In a situation like this, the level of talk should not be about criticism against Americanism but criticism against Japanism. Probably, I have extended the topic rather strangely. This is all I have to say.

M.C.: Professor Mizobe Thank you very much. We will continue the discussion by allowing some of our participants from the floor to speak and as we are getting close to the end of this symposium, let's take a really short break of around five minutes. Please have coffee and other refreshments during the break.

(Recess)

M.C.: Professor Mizobe I would like everyone to take their seats as we are about to recommence proceedings. I would appreciate your cooperation to keep things on schedule. We have received a number of expressions of interest to make comments from the floor but, as is consistent with the usual practice here in Japan, we have invited three persons from the audience to respond, Professors Kawakita, Kimura and Miwa. We would like to start with Professor Kawakita Minoru.

Professor Kawakita First of all I should explain that due to circumstances beyond my control I was unable to attend yesterday's actual presentation, for which I apologize, however I have of course had an opportunity to read the paper and would be privileged to be able to offer some comments. As a historian I do not normally take up contemporary issues and so my comments may seem slightly wide of the mark,—your forbearance in this regard would be appreciated. I read the papers by Professor Brunkhorst and Signor Fini with great interest and although there were a number of differences in their view of contemporary circumstances they were both in their diverse ways plausible and cogent. If my understanding is correct, Professor Brunkhorst highlights a number of aspects where globalization is somewhat different to Americanization. His emphasis is on phenomena such as international organizations, international accords, treaties and the like, and on that basis he examines the workings of institutions and legal systems beyond complete American control and their gradual reconfiguration. I tend to regard a vision of the international order of the near future in terms of this conception of globalization or, as is closer to my own interest, the world system, as presenting the least contentious perspective. However, while I would certainly hope that this vision comes to pass, I also can't help wondering how far it can be realized in practice. At least when considering the world situation from here in Kyoto, Japan, there are clear indications that things certainly don't tend to go that way and in reality it appears that the phenomenon of globalization is indeed quite close to Americanization. At the time of the Iraq issue it was clear that neither Kofi Anan nor Muhammed El Baradai could exercise any power to speak of so that history was actually unfolding largely in accordance with the decisions of George Bush. Consequently, though I certainly don't pretend to fully understand the intricacies of international law as Professor Brunkhorst so eloquently and comprehensively laid out, I could not help but entertain certain misgivings about his position

On the other hand, Signor Fini's position, though certainly somewhat novel, presented something that I could more readily relate to. As with him I too prefer to consider things over an extremely long time span. Also, in connection with the question of what constitutes the main feature underpinning the development of contemporary globalization within the world system, Signor Fini referred in various places to both the obsession with developmentalism in tandem with a certain paranoia,—something that I have myself dealt with under the rubric

of “growth paranoia”. I believe that it is precisely this anxiety about constantly maintaining growth in material goods to avert economic collapse that has been one of the main features of the European, or rather perhaps we should term it the Euro-American world system since the sixteenth century. I believe the last commentator spoke very much in the same terms of this constant drive to pursue economic growth even at the cost of excessively provoking greed and that is very much in keeping with my conception of the character of the modern world system.

This leads us to what I regard as the greatest problem in modernity, the fact that this system is unsustainable or, to put it more simply, cannot be expected to go on forever. As I mentioned before, Professor Brunkhorst’s view was certainly the least controversial and presents an eminently desirable scenario, however I would venture to ask exactly what power it is that drives globalization, whether or not it can be curbed and just how long we can expect it to sustain itself. In essence, what is it that drives the world,—that is the ever-present problem before us. It is here that we are forced, in my opinion, to address what I termed growth paranoia and it is precisely because Signor Fini recognizes the impasse and considers things within a longer time frame that I find much to agree with. Nevertheless, I would mention one or two points where I have some reservations about the plausibility of his explanation. As to the highly convincing points, he certainly explains the contemporary situation well and presents a forceful critique of it. However, when it comes to the matter of what we should do as a consequence of that critique, there is little in the way of discussion of political policy. When it comes to the question of what we ought to do in terms of practical politics there is no response,—we end up with “The current situation is dreadful”, and that’s about it. The weakest point in his position is that ultimately he fails to address the most pressing issues of where the world is heading and what sort of world it will be.

If we are to proceed from the current deadlocked world toward a future one it is clear that from the viewpoint of “growth paranoia” that that world will have to be a free one. This is something recognized by a variety of people and in political circles it has been raised in relation to the issue of a sustainable society or sustainable growth. However, it is only a matter of time until we really know if sustainable growth is truly feasible, the inevitable deadlock being pushed further back, much as on the theoretical level the issue of unconstrained growth has also been shelved. In any event, the failure to find an answer to such issues is the basic flaw in Signor Fini’s perspective, although I must concede that it is a problem that I have had to grapple with myself. As a historian, I have tended to conceive of the modern world system in terms of growth paranoia. However, more lately I have become interested in the question of whether there has been any other world system that has shared this outlook, that is to say, whether there has been any other case of a world system that has been paranoid about perpetual growth and a system predicated on freedom. The traditional world of China had the structure of an empire but was it predicated on the notion of perpetual growth? The world system of the thirteenth century is often referred to but we would have to say that, although the Mongolian world system displayed an extraordinary greed for geographical expansion, it nonetheless did not illustrate an unconditional regard for economic expansion,—at least not in the sense that I have been referring to it. In point of fact I even wonder how far the concept of economic growth itself was developed in these cases.

More recently I have come to think that the most pressing object of my research is not so much the modern world system itself, nor even growth paranoia, but rather the circumstances under which a radically different value system, namely one where freedom is prized as the absolute corollary of perpetual growth, has come about. At recent historical conferences, Asian history, especially Asian economic history, has become very popular. In one sense I think this stems from fact that Asian economies have had a strong impact on a practical level, however it is somewhat regrettable to note that this interest in Asian economies has been framed in terms of Asia being able to foot it with America and Europe in terms of economic growth so that there has been no development of a conception of economic growth in Asia beyond the “growth paranoia” paradigm. There are plenty of compliments being offered to Asia’s recent accomplishments but these amount to little more than the acknowledgement that Asia is now doing what once seemed to be only possible in Europe. This means that essentially we remain within the same paradigm of the world system established initially in Europe and that means, in turn, that we are partaking of merely the same dead-end.

Consequently, I have the impression that our pronouncements lack the capacity to persuade so long as we are unable to present a slightly different world. Given that Professor Hazama will most likely make comment on East Asia later on, it is probably not my place to touch on such matters, however I would like to query whether Signor Fini’s view that Europe should close ranks to withstand American hegemony implies that East Asia ought also to join together to do the same. Furthermore, I would think that Professor Brunkhorst also tends to regard the notion of the unification of East Asia in a positive way. That may of course be a perfectly good thing however, when taken from the various standpoints of the people of Asia, the unification of East Asia is highly problematic. I have discussed this possibility with a variety of persons but most conclude that it is nigh on impossible, and there is no-one who positively believes that it be done. The factors most commonly cited are cultural differences, for example the fact that Asia is markedly different to Europe which has a predominantly Christians heritage. Issues related to the Post-War settlement, including such concrete disputes as the Yasukuni Shrine visits, are also raised. Nevertheless, I believe that other aspects are perhaps more significant. When we consider the process of unification of Europe, we should note that the most decisive initiative at its inception was formation of the ECSC. This was overwhelmingly decisive in my opinion. Given that two countries that had previously been locked in a protracted war took such a decisive step to share their energy resources, I would expect that Asian unification would also require, if it were to proceed at all, precisely such an initiative. The cultural differences are, speaking somewhat simplistically, things that can be left to one side,—although I expect various specialists would have various things to say about such an assertion. In any event, I believe that history needs some revolutionary reworking to be able to contribute some practical assistance to policy making, though sadly the problem remains that current historical research does not seem to heading in any such direction. Japan’s contemporary politics has become dominated by market fundamentalism and so I find myself unable to conclude other than that we are practically headed towards Americanization.

Ultimately it would seem that Signor Fini’s conception of the world of the near future is one whose entirety is structured on the basis of certain regional agglomerations, America forming the central axis with the EU and

East Asia acting in relative autonomy. On the other hand, the future according to Professor Brunkhorst is one where the nation-state retains something of its significance in international affairs while international institutions and international law increase their control on the world in a manner that is supra-national and does not embody the hegemony of one particular state. Well, as I have said before, that is certainly a rather optimistic view of how a benevolent world government may come about. The two competing scenarios offered by our speakers are both plausible yet I am left with the impression that in both cases they are equally untenable in practice. That is all I have to say,—thank you for your attention.

M.C.: Professor Mizobe Thanks you very much for your comments. I hasten to add that I omitted to mention that Professor Kawakita Minoru is an Emeritus Professor of Osaka University who is currently a visiting professor at our university. He widely recognized as an authority on Western history based on his research in to the English industrial revolution from the perspective of world system theory.

And now to continue with the comments from the floor I would like to invite Professor Kimura Masaaki who completes his tenure at Kyoto University at the end of this month. He is well known for his research on the structure of Indian society throughout its history particularly the caste system although more recently he has produced a major work entitled “The Socio-Historiography of The Great Transformation” which examines modernization from the perspective of comparative politics. Professor Kimura please go ahead.

Professor Kimura I will endeavor to make this brief. There are two points that I would like to mention. The first is that although I had the impression yesterday that there was a considerable hostility toward Americanization, however today the tone has been somewhat milder. Moreover, we have been presented with a rather optimistic view of the prospects for the EU and East Asia and it is with regard to this that I would like to make some slightly more pessimistic remarks. I should firstly admit that I too regard the establishment of an East Asian Community as facing difficulties in practice. There are several reasons for this but I will mention two in particular. The first is the fact that China is geographically too large and has the potential to develop into an economic and political giant in the future. If this is the case then a regional community will not go well at all. In this connection we should also note that although they tried to establish a regional community in South Asia it eventually foundered due to India’s overwhelming position. That’s the first reason. The second is the huge disparity in the experience of Europe and East Asia over the last three to four centuries. More specifically, since the inception of the Westphalia Treaty in 1648 the countries of Europe have coexisted within an international system of sovereign states, whereas in East Asia there was, at least up until approximately a hundred years ago, a tributary system,—a Pax Sinatica centered on China. Their historical circumstances have been completely different. It is therefore to be expected that when it comes to the prospect of developing a regional community in East Asia, the various countries on the periphery of the former tributary system are bound to have deep misgivings. So far as the EU is concerned, I am also inclined to state that I am very critical of the prospect of the EU constituting a global power to resist America. The reason is that the EU system embodies something of a paradox; as it enlarges and incorpo-

rates new members the need to integrate these new countries becomes that much greater as well. In other words, as the EU gets larger it cannot help but become increasingly inward looking. That is the essence of the paradox which casts doubt on Europe's capacity to evolve into a global power. The other main reason that I would like to raise relates to the cohesiveness of the EU as an organization, something that is more closely connected to Professor Brunkhorst's argument. According to Professor Brunkhorst, the functional system at the heart of modern capitalism has been integrated within various nation-states. However, as the result of globalization, this form of integration has been seen to not function altogether well. That is the key problem with the global system. However when we look at the EU we have to ask the same questions as we did about the nation-state,—to put it more simply, we need to clarify whether the EU is able to integrate the functional system in the same manner as the nation-state and whether, as an organization, it has the same capacity to bind everything together. On a more concrete level, we may well talk of nation-states as a given unit yet we see that in the nineteenth century nation-states had a class-determined aspect, much as Marx argued. In the twentieth century this class character has become embodied in powerful ideologies and ideals revolving around democracy, civil society and nationalism and has resulted in its possessing an extraordinary power. When considered from this perspective, it seems unlikely that the EU itself is able to tame the forces of globalization,—at least I am not optimistic about it. If the EU is unable to surmount these problems within itself, there are various problems that can be anticipated. For example, conceivable problems that come to mind are: class-based control,—a situation where a handful of the elite are set against the masses,—excessive lobbying, or the scenario where France or Germany become hegemonic powers. There are many other points that I would have liked to raise but given that everyone must be fatigued by now I will leave it at that.

M.C.: Professor Mizobe Thank you very much for your comments. I would like to proceed to Professor Miwa Kimitada, an eminent scholar who hails from Sophia University and is renowned as a specialist in Japan's diplomatic history. Please go ahead Professor.

Professor Miwa I am from Sophia University. I retired from teaching five years ago but I have been continually involved with issues such as this. Wonderful and new information has been offered today from various perspectives on the topic and I am glad to be a part of this forum. I think that if I add some of my thoughts on the mosaic of ideas already formed, it will further create an interesting picture.

Before I talk about Japan, let me talk about Canada and Mexico, two countries that are contiguous with the United States. Canada is in a certain sense very un-American, and at times, even anti-American. This has been the cultural consciousness of Canada. During the Vietnam War, this is where young Americans escaped to avoid conscription. These young Americans chose not to go to Vietnam to kill. Regarding Canada, it is unbelievable how little interest Americans have towards this country and how little can be gleaned from the college-level textbooks. There are a number of thick American History books; a Canadian scholar checked the index of one book and found that the word "Canada" could be found only six times in the index. On the other hand, in Canada, there

is a book called “History of Canada”, which is a textbook used in college, and “United States” appears 100 times in its index. Despite the closeness of these countries, they have different degrees of interest in each other. I think that we can say the same thing about Japanese-American relations. In addition, regarding the country on America’s southern border, Mexico, the most conspicuous thing that Americans know about Mexico is the problem of illegal immigration. Here, it is clear that there is a problem of racial discrimination. It can be observed that as between American and Canadian intellectuals, there is a big difference in the level of interest in each other between Japan and America. Similarly, in America’s relation with Mexico, what is clear is that it resembles the problem of racial discrimination.

In a word, it can be said that the position taken by the Japanese towards Americanism has developed around the issue of humanism. In EU and American relations, this problem couldn’t possibly occur but in Japan-America relations, it is very basic. A typical example would be during the time when America, France, England and Japan entered into an agreement as four imperial powers in the Pacific Area. In the 1920s, these four powers had a cooperative agreement concluded under the Versailles-Washington treaty system that to create peace, there should be balance of military power. However, in 1924 an anti-Japanese immigration law was passed in the U.S. and this became a source of tension in Japanese-American relations. This is a typical example of the problem between Japan and the U.S.

This problem could already be seen when Japanese elementary school students were prevented from attending school in the city of San Francisco right after the 1905 Russo-Japanese war. Ordinary Americans considered the Japanese as sexually very immoral. They were deemed to be a bad influence on the young Caucasian girls. Some Japanese were lynched. They were murdered in the mountains east of San Francisco. These incidents were recorded in Japanese newspapers. Right after the Russo-Japanese war in 1905, which the Japanese won, there was self-confidence among the Japanese now that they had acquired equal status with the big powers, which were exclusively of white race. They were enraged by these incidents. Many books were written on both sides of the Pacific on the theme of “If Japan and America Fight”. On the other hand, a prominent Japanese international jurist penned a book with the title “The New Japanese-American Relations”. What should be said about the content of this book is that it describes the transformation of Japanese-American relations from one that is similar to uncle-niece relation to one that is of equality. In 1924 when the anti-Japanese immigration law went into effect in the U.S., a patriotic group, including some elite students from Tokyo Imperial University, gathered in the Imperial Hotel where the American Embassy had moved itself because its buildings had collapsed during the great earthquake of the previous year, 1923. There many staff from the American embassy were swinging on the dance floor, These students entered there brandishing their drawn swords, blaming America for its sins.

At Princeton University, there was an American historian named Arthur Link. One time he was invited to an academic conference in France on America at Sorbonne University, to give a talk to scholars who specialized on America. The head of the conference motioned to Professor Link to enter the spacious conference room, and when Professor Link stood on the platform, he could only see 12 or 13 people on the whole floor. In other words, American History was not a popular field of historical research in Europe even in the 1950s. It was the same in

Japan before the war, when there was no such thing as a research field in American studies. All the interest in America was confined within the field of Western History and ended at the point when America won its independence from England.

Nevertheless, for the Japanese, America was one civilization that they should learn from. It was the civilization that replaced Chinese one. Of course, there was also European civilization. However, after the Second World War, American culture became a forceful influence in Japanese society. At that time, what was the awareness of the Japanese regarding America? Going back to the last days of the Tokugawa Shogunate, after the country was opened, the Japanese already had a fondness for American civilization. Please recall the circumstances of John Manjiro as he drifted out to sea in his whaling boat. A kind American ship captain rescued him and took him to New England. This young Japanese felt a sense of obligation to the ship captain, something he could never forget throughout the rest of his life. The ship captain who rescued this young 15- or 16-year old Japanese fisherman introduced him to his church in New England. However, the other church members objected to the presence of an Oriental in their church. At that time, racial discrimination was something American Christians had not yet overcome. The ship captain could not agree with the racial prejudice of his church, so he decided to go to another church. Although his new church was far away, he did not hesitate to leave his old church when they rejected Manjiro because of his race. Although America was founded on the values of Christian civilization, within America itself, there are many who turn their faces away from Christ. What I am trying to say is that the self-righteous America-centered principle and Caucasian-centered principle, which are pseudo-Christian, do exist.

During the Russo-Japanese war, there were many Russian prisoners taken to Japan. In Matsuyama, Shikoku, there was an American missionary named Sydney Gurick who had come to the area over ten years before. In his letter to his church headquarters in America, he wrote the following: "Where I work as a missionary, ordinary Japanese who are not Christians relate to the captured Russians like human beings; the non-Christian Japanese, compared with American Christians or Russian Christians, follow Christ's teachings and serve the philanthropic cause". No matter how much the Japanese government asked the Russians to return the injured Japanese, they were never returned to Japan. Finally, all of them died. Furthermore, in the motherland of the missionary, America, the blacks, because of their color, even if they were innocent and did not commit any crimes, were killed, hanged from trees or set on fire without trial. These were the acts of American Christians. I am saying that the Japanese, even if they were not Christians, have demonstrated more philanthropic spirit. This was during the Russo-Japanese war.

The favorable comments of such as those of the missionary about the Japanese strengthened their self-confidence. However, ten years prior to the Russo-Japanese war, how were the Japanese viewed worldwide? Something happened during this time. Professor Zhu is here. I would like to hear what Professor Zhu has to say on this incident. I think it is a very important piece of information, and an important historical scene.

It was during the Sino-Japanese war in 1894. The New York *World* newspaper, well known for yellow journalism, and owned by Joseph Pulitzer, had a correspondent named James Creelman. He entered Port Arthur along with the Japanese troops from the Korean Peninsula. On this journey, he witnessed the massacre of the Chinese

remaining in the city by the Japanese military. Port Arthur was an international city, so the staff in the different consular missions that had a presence in Port Arthur had seen the actual scenes of the massacre. Everyone agreed that 2,000 people were massacred. Women and children were killed as well. Creelman promptly wrote an article reporting the massacre and used the wireless facility of the Japanese Central Command. Via Yokohama, his article went on via Vancouver to New York. The news of the slaughter flowed throughout the world with the publication of this article in New York. Reading the article now, I thought how fantastic it was. This American journalist condemned both the Japanese and Chinese military in the name of civilization.

The Nisshin War or the Sino-Japanese war, which lasted less than one year from 1894, was especially considered by Japanese Christians as a war of civilization. The civilization referred to here is the American Protestant Civilization, which Japan was fighting to spread to China through the Korean Peninsula. Observing international law, the war was going to be conducted in a civilized way. In the course of the war, prisoners of war would be sent to Japan and would be allowed to walk around the town where they were taken; this was the way the prisoners of war were handled. However, the massacre took place at Port Arthur. The Japanese Ministry of Foreign Affairs immediately confirmed that 2000 people were killed, but denied that there were women and children among the dead. The ministry claimed that those killed were Chinese soldiers who fled in civilian clothes. In Creelman's report, he wrote: The mask of civilization which the Japanese soldiers had worn until yesterday, was cast off, and they became savages. It takes more than one generation to turn a savage culture into a civilized one. Both the Japanese and the Chinese are savages. I can understand why the Japanese army committed the massacre. Upon entering Port Arthur, they encountered the disjointed heads and arms of the Japanese pows were hung over the main street. When the Japanese soldiers saw this, they got enraged and deviated from their mission. The sight of their mutilated comrades pushed them to commit the massacre. However, if they were civilized, they wouldn't have reacted in such a way. One generation is not enough to convert a savage culture into a civilized one".

There is something I would like to ask Creelman. In 1890, four years before this first Sino-Japanese war, the Wounded Knee Massacre of Sioux Indians happened in South Dakota. How would Creelman explain this massacre? With the power of 500 mounted American patrol troops, 350 Indians, including women and children, who were in an encampment in a frozen ravine in the depths of winter, were showered with bullets. From the surrounding small and high mountains pouring gunfire came and more than half of those Indians died or were injured. Justice and humanity were totally absent there. In the war of annihilation that the U.S. waged against the Native Americans, it was clear that the genocide could be attributed to their view of them as an inferior race. There were a handful of Americans with good conscience who took the wounded survivors to a nearby church where Christmas decorations were still hanging.

Lastly, I would like to say something about those who cooperated in the U.S. occupation of Japan after the war. There was a distinction between collaborator and collaborationist during that time. A very different thing from Iraq, I think. In Japan, there were those who championed American values and they were referred to as collaborationist. There were intellectuals and politicians who thoroughly cooperated with the occupiers because of their beliefs. Opposite to them were those who wanted to play along with the status quo, and since there was

nothing they could do about the situation, they awaited the end of the occupation; until the post-war turmoil ended, they cooperated. And they thought that after the occupation, the constitution and what the Americans did should be changed. That is the special feature of Japanese-American relations after the Pacific War. Furthermore, until now, this is the same posture that has influenced the Japanese people in their attitudes towards America. It is a standpoint that while the Japanese highly value American freedom, they are critical of America's violent exercise of power. It is an ambivalent posture. Let me end my speech at this point.

Chair: Professor Mizobe Thank you very much indeed. The final comments will be made by an eminent Molecular Physicist from our own university, Professor Sogami Ikuo who we invited to participate in order to provide a perspective from the sciences. Professor, given the time constraint, please present your comments as concisely as possible.

Professor Sogami Thank you very much and thanks indeed for the opportunity to address the symposium. As a physicist I must certainly come across as something of an unusual choice of participant, however, I would nonetheless like to at least attempt to make some comment on the symposium from the viewpoint of physics.

One of the fundamental concepts in physics is inertia. All material objects, so long as they are not subject to external force of some kind, are subject to the universal law that they will maintain their momentum indefinitely. This is the very important principle of inertia initially clarified by Galileo and Newton. Naturally, I do not believe it is possible to apply a concept of natural science directly to the various details and phenomena pertaining to international politics without qualification. Nevertheless, when I consider the current of events transcending our lifetime over a very long time span, I cannot help but feel that there is some relevance of inertia to various issues in international affairs. For example, the theme of this symposium is "Anti-Americanism" and presupposes an America that throughout the twentieth century has been subject to a variety of external forces to reach the condition that it is in now. Yet despite having been unable to avoid becoming embroiled in such great upheavals as the First and Second World Wars, and the Cold War, America has nonetheless demonstrated an enormous degree of inertia. This is the sort of country that Europeans have had to come to terms with and find some point contradistinction, —and indeed that is very much what I believe this symposium has had as a main theme.

In relation to this theme Professor Brunkhorst seems inclined to view the global system of internal organizations and its counterpart system of international law in a positive light, taking the stance that these will gently break down that unwieldy inertia of America through some kind of mediation of forces. By contrast, Signor Fini has been more confrontational. America's overwhelming presence has been likened to a steam train, an out-of-control steam train to use his expression. The only option open to Europe to slow this runaway train down, it seems, is to cut loose somehow. In order to do that, he proposed that Europe would have to reconfigure itself according to some sort of isolationism. I would certainly have to agree that in order to restrain such a powerful inertia, breaking up and breaking off are an effective method to adopt. The problem, however, is how this can be done harmoniously. While listening to the arguments of the two presenters, I could not help but feel very strongly

that, when it comes to debating “Anti-Americanism”, we should not neglect the importance of remembering where the responsibility for letting America possess such a strong inertia in the first place lies.

I also listened to the remarks of the commentators with great interest. I would like to briefly touch on the remarks of one of the commentators, Professor Mishima. It is now sixty years that have lapsed since the end of World War Two, yet we find that between Japan and China, as well as between Japan and Korea (North and South) there remain various points of contention over the post-war settlement. As a lesson in how one should deal with such difficult issues, Professor Mishima referred to significance of the German Chancellor Willy Brandt’s visit to Warsaw. It makes one wonder what it takes to change the direction of a system that has been propelled with such enormous force. Perhaps it indicates that in order to adroitly suppress a great force that has become a part of history there is a need for truly humane acts that demonstrate heartfelt commitment. Professor Mishima so persuasively demonstrated that no matter how great the historical problem at issue, we must respond to it and seek to resolve it, as indeed it is a product of humanity, through truly humane acts. I was profoundly moved by Brandt’s conduct and the significance of his “politically symbolic gesture”.

One of the other things that I found through participating in this symposium over the last two days is just how much people like to talk. And to do so eloquently. However, it is extremely difficult to grasp the fundamental consistency of an argument in the midst of an extremely long stream of eloquently presented arguments. I dare say that that is the point wherein the difficulty of political thought and international politics resides. While paying my sincere respect to the colleagues who have been engaged in such difficult scholarship I would nonetheless confess to my considerable fatigue and leave my comments at that.

Chair: Professor Mizobe Thank you indeed. We have come to the point where we would like to invite Professor Hazama Naoki to make some overall remarks to conclude the symposium. Professor Hazama has formerly researched Chinese history within the Institute for Research in the Humanities at Kyoto University over a long period but is now a Professor within this university and has been given the task of winding up proceedings. Go ahead Professor.

Professor Hazama I believe that we’ve had eight to nine hours in all,—the two presentations, the commentators’ presentations and responses in turn to those comments, and so on. I think that making some general remarks on such a volume of discussion will certainly be difficult. For me this is the first time that I have been in such a multifaceted event and I fear that in the course of what I have to say I may well have misunderstood or misconstrued the intent of some of the speakers,—please pardon me if that is the case but, in any event, I will not to avoid this if I am to keep my speech to twenty minutes.

I think I could say that the theme of the symposium on this occasion relates to a the somewhat extended time span straddling the momentous events of 1989 and September 11, 2001. Though I am not a research associate of the Institute for World Affairs and have become involved in this project toward the end, I would like to focus on the often made reference to American hegemony. This is something that many people are concerned about and I

understand that the theme of the symposium was set with the aim of considering the future direction of the world and what to do about such problems. In this case it seems that the aim was to analyze the international political situation using the European view of America, or “Anti-Americanism”, as the central axis. There were two presenters and six commentators. Moreover, the views of the seven nationalities represented were combined with the special viewpoints of a number of disciplines within the humanities and social sciences. Consequently it hardly seems surprising that there was a substantial difference in the content of what people were saying even when they were using the same terms, though I feel that everyone pursued the debate understanding each other’s position adequately and demonstrating a willingness to listen. Even so, the central idea embodied in the term Americanism, so far as I could tell from listening to each presentation, seemed to be the very term that generated the least consensus. I guess that couldn’t be helped given that each person takes one aspect of this enormous idea and then seeks to adapt it to the framework of their own specialization. As a result I would have preferred to see more attention given to analyzing the origins of such terminology and ensuing development of its usage. According to Professor Romano Vulpitta, the concept was already in use at the time of the inception of the American independence meaning that for that time at least it signified that the founding basis of the republic was to redefine itself away from Europe. It would be strange if it were any other way.

In this connection we might well consider the rise of the term Asianism, a term that came into use during the nineteenth century as Asia was attempting to modernize. Indeed we might ask ourselves here why there is an Asianism without the parallel concept of Europeanism at this time. The answer lies in the fact that Asia had a pressing to define itself in contradistinction to Europe. While Asianism later on developed into a rather expansionist and arcane ideology it should nonetheless be remembered that at the beginning of the Meiji period in Japan it was nothing of the sort. There was a genuine attempt to clarify what Asia should do to compete with Europe and the leadership of Japan at that time were well aware of it.

One aspect that was highlighted about Europe at the time was the fact that there was a common language amongst the Europeans, English. It was therefore considered that Asia also needed to promote a common language and it was for that reason that *Kanbun*, classical Chinese, and the Mandarin was adopted as an ideal. As a result almost all the early Meiji Asianist magazines and journals were produced in *Kanbun*, even into the second decade of the Meiji period when the Freedom and People’s Rights Movement was at its zenith. I won’t go into how the same issues were dealt with in China at this time suffice to say that there was a broad movement based around the notion of Asianism.

Americanism was a term that was born very early and evolved and developed over some two centuries. As a result its substantive content has changed significantly and today, as you will recall from the presentations heard at this symposium, it has come to encapsulate a number of different facets of meaning, including a shift towards the contrary notions of Americanism and Anti-Americanism. Having said that, there remains the inescapable conclusion that one arrives at after reviewing all the presentations, comments and debates, namely that there is a very broad agreement that American hegemony is something that is very threatening in today’s world. I was also rather profoundly surprised yet enlightened by the comments of the American presenter when he said that the

issue of American hegemony was no problem at all and that international law was in fact something of a myth. I realized that is indeed how Americans can see it and although I won't go into the issue of whether that is correct or not I am reminded of Mr Hazu's discussion of the cultural background of America and how it impinges on such issues.

The focus of the original presenters' discussion was on things that emerged from a time before the nineteenth century, yet they brought our attention to their relevance to the present. Professor Brunkhorst's view was indeed that within the process of historical progress international organizations and international law were now functioning to act as an axis for reconfiguration of the world in order to resolve problems. Signor Fini's view, by contrast, was rooted in the basis of daily life and argued, without simply suggesting that we ought to return to the past, that in order to avert our own destructing we need to adopt a more balanced way of life. Though he referred to self-sufficiency quite often I realize that he was not using it in a literal sense but simply to underpin his notion of an independent regional community in Europe.

On the basis of these views we have attempted to arrive at some resolution of issues related to the fundamental problems of the contemporary world, using Europe and its interconnectedness with America as a focal axis. As a natural corollary to this some discussion of the relation between the West and the East has also arisen. In that vein the issue of just how far integration within East Asia could proceed has also received a considerable amount of attention, including extensive debate regarding the merits of the EU model for East Asia. On the whole that scenario's feasibility was perceived negatively by most respondents. Actually I don't see any problem in that debate however I think it significant that the Chinese and Korean commentators were able to take the East Asian issue, adapt it in their own way to their own particular concerns and pursue debate on a number of issues on that basis. Also Dr. De Prado, while arguing that knowledge can be employed to supercede military force, suggested that this had applications in the East Asian context.

It now falls on me to make some comprehensive remark on all the varied responses to the original central problem,—whether my comments will be on the mark or not remains to be seen. Given that there has been so much debate pursued over such a long time it seems that there is a particularly need to establish some sort of common ground, some kind of level playing field. Though everyone's views were so diverse and there were genuine points of disagreement, the one thing that I believe everyone would agree on is the fact that we all hope for a world of peace with as few problems to solve as possible. Professor Mishima suggested that the thing operating to control international relations was not morality but international law and while I acknowledge that in practice that ought to be correct, the fact remains that these laws are so seldom maintained except in exceptional circumstances,—as one person said they are essentially being perpetually violated—so I do wonder if law by itself is truly adequate. I rather think that after all there is a great need for a moral basis to law. For example, as everyone is well aware, we had the case of President Bush arguing the case for the invasion of Iraq on basis of there allegedly being weapons of mass destruction. On finding that there were in fact no weapons of mass destruction the justification was renewed from a completely new quarter. Basically, rather than taking responsibility for one's original statements, this was simply an exercise in manipulating words to back up the thing that one wanted to

pursue. If this manner of using words were to be observed in the conduct of an ordinary person we would certainly expect that person to be denounced as a liar. And even aside from the issue of the weapons of mass destruction there are many other examples of where this duplicity occurs. I might even refer to an incident here in Japan recently which rather shocked me, namely the response of Prime Minister Mr. Koizumi to a question in the Diet regarding the deployment of the Self Defense Forces in non-combat zones. In response to the question he stated that the area that the SDF was going to in Iraq was indeed a non-combat zone. If this were a Junior High School exam question testing a person's understanding of the term "non-combat" I think that response would score a zero. Yet, of course, in Japanese politics that sort of statement is allowed to pass. The fact that this sort of nonsense is permitted to stand is not a matter of knowledge or logic. It is quite simply a fundamental matter of ethics.

So we have a situation where America proclaims its goodness but we have found that many of the respondents today, in one way or another, have to regard it as a rather self-serving goodness. So we need to ask ourselves whether or not there is any way to reassert the genuine goodness against the self-serving one and thereby win out over the nonsensical double-talk that no ordinary person would come out with. Putting it very crudely, the fact is that the right of the ordinary person's voice to be heard has only come about in the course of writing human history and it is from there that an awareness of the need to establish a common set of values has emerged. In Professor Zhu's presentation there were of course a certain number of negative assertions made, however I noted that he posited the existence of a core of common East Asian values. It occurs to me that if we can achieve some notion of common values in East Asia then there must be something wrong if we cannot establish something similar on a world scale. Just how feasible that is we might like to discuss on some other occasion but it seems that the key difference to be overcome if we to realize this objective lies in resolving a fundamental difference between the West and the East, starting with a consideration of how Eastern civilization has responded to Western civilization. In the Late Ch'ing period Chinese students came to Japan to study. As they were studying various things in Japan the thing that seemed to be most strongly impressed upon them was that while they were impressed by Western Civilization it was only so far as its material and organizational accomplishments were concerned. They retained a strong affinity with the Chinese scholarship regarding human thought and morality. Whether or not that was altogether correct or not I will not go in to, however it is significant just how many indicated this outlook in their diaries and such like. They also were not writing from hindsight either, this was what they were writing as they were digesting the learning that Western Civilization had to offer,—and there a great number who found that learning less than complete, in some regards profoundly wrong. I suspect that was in fact a very widely held belief in China at the time. It is also interesting to note that almost none of the Japanese students that went to study in Europe came back feeling anything like the same ambivalence.

Among the Late Ch'ing scholars in Japan, the one who had the best political pedigree and did in fact go on to become a prominent politician was Song Jiaoren (宋教仁). He was also very adamant in his ambivalence about Western learning in the sense I referred to earlier. A little later on Sun Wen (孫文) was also to assert repeatedly that the Great Learning, the ancient Chinese classic containing various chapters on good government and morality, was the greatest treatise on politics and philosophy ever written. The truth that I suspect such figures were

driving was the simple fact that the proper cultivation of the human heart is at the root of good politics.

I have highlighted these things as part of the flow of history not simply to end up with the conclusion that in the comparison of West and East, the East has its commendable points as well. What I would finally like to leave you with is something that I did not think up myself but something very enlightening that I found in the course of reading some twentieth century Confucian writing on the fundamental difference between Christianity and Confucianism. In the writing of New Confucianist Du Weiming (杜維明), there is reference to the Swiss theologian Kuhn who outlines the most important precept in Christianity as being “to do unto others as you would have them do unto you”. In response to this reference is made to the Analects of Confucius which enjoins the reader “to not inflict on others anything that you would not have done to yourself”. When comparing these two precepts there may well seem to be no difference, however when we think about it there actually is. Which reaches to a more fundamental level? I actually think that it is the latter,—“don’t do to others what you wouldn’t have them do to you”. Taking the case of America’s notion of goodness as a case in point, we see that doing what you would like to others seems to degenerate all too easily into simply seeking to impose what you think is good on to others. By contrast, if we consider the proposition that we don’t do to others what we would not like to have done to ourselves and apply it to the Iraq question then we find that we are forced to consider the position of those who are having their country invaded and acknowledge that indeed this is not something we would want ourselves. I’m certainly not suggesting that Confucius was greater than Christ,—what we need to do is recognize mutual differences and consider contemporary problems on that basis. As part of this symposium which has addressed the problem of Americanism head on with considerable fervor, I hope this suggested common ground provides some avenue for future opening up of discussion. And with that I would like to end my remarks. (Loud applause)

Chair: Professor Mizobe Thank you very much indeed. There were four hours left open for the afternoon session which started at two o’clock and so I thought that we would have more than ample time at our disposal. However, as we see, the time has flown by.

I am sure that there is still much that remains to be debated however I would like to formally draw to a close this symposium which has been held over the last two days and invite you show your appreciation for the two main presenters, the six commentators and all those involved in support roles as translators. Thanks you very much everyone. (Sustained applause)

[End of the Day Two]